日本語音韻史から見た沖縄方言の三母音化傾向とP音

柳田征司
（国語学研究室）

一、本稿の意図

日本語音韻史について思いをめぐらす者にとって、沖縄方言は大変気になる方言である。

なにしろ、京畿のことばにおいては文献時代以前に存したと推定されるところのハ行音のp音が残存していると言われ、更に、母音はa・u・iへの三母音化傾向を示しており、しかも、これに京畿のことばでは上代に存したと見られる上代特殊仮名遣甲乙二種の音がからんでいるという説まであるからである。九州方言や東北方言が、古くてもせいぜい、京畿のことばにおける中世後期、室町時代の言語の様相を呈しているにとどまるのに対して、海を南下すると、そこには、京畿語における上代語やそれ以前の言語の様相を示す言語が現在に存しているというのだからである。日本語音韻史について考える者は、これに目を凝らさざるを得ないのである。

しかしながら、右述のような沖縄方言のとらえ方に対しては疑問も出されてきている。先ず、母音について見ると、上代の甲乙二種の音の残存を考える説は依然として存するが、三母音化傾向、即ち、沖縄方言の母音の現況を五母音から説いていく立場が次第に一般化してきている。[注1]また、p音についても、亀井孝氏は、本土におけるハ行音が相当後までp音であったという可能性を考えることによって、両者を近づけてとらえようとしておられる。そして、その他の言語事象にも注意して、氏は、次のような「見とおし」を立てておられる。[注2]

○琉球語は、有史以前の日本語へはさかのぼりえない。（四二六頁）

○琉球語の日本語からの言語史的分派はいままで考えられてきたよりも、はるかに若い時代に属するとすべきであろう（同）

また、沖縄言語研究者たちからは評価されていないようであるけれども、『おもろさうし全釈』の著者鳥越憲三郎氏は、その文法事象を検討して、「琉球語が日本語から分かれた時点を奈良以前に比定するこれまでの言語学説を、少なくとも近世初頭にまで下げることができるとするのが、本書の得た成果の一つでもある。」（巻一、一六一頁）とされている。

筆者は、先に、ア・ヤ・ワ三行の歴史について考え、[注3] また、日本語音韻史におけるp音の残存と再生について考えたが、[注4] その考え方に立って沖縄方言を見てみると、その三母音化傾向とp音とが、いずれも、京畿のことばの中世語の段階から生まれてきたものではないかと考えるようになった。この推定は、九州方言との関連から言っても、極めて自然なのではないかと考えられるので、以下に考えるところを述べてみたい。

一体、従来の我々は、沖縄方言がなぜ三母音化傾向を示しているのか、なぜハ行音がp音であるのかといったように問題を設定し、それを特殊視しすぎてきていたのではないであろうか。沖縄方言の側に身を置いて考えれば、本土方言がなぜ五母音であるのか、なぜハ行音がΦ音を経てh音に変ったのかと考えざるを得ないはずである。この場合、五母音が古い姿であるから、その状態のままの本土方言は問題にならず、三母音化傾向がなぜ起きているのかを考えればよいとも言えそうである。しかし、それならば、ハ行音の場合は古いp音をそのままとどめている沖縄方言の方は問題にならず、本土方言においてハ行音がなぜp＞Φ＞hと変化をとげたのかが問題にされなくてはならないはずである。沖縄方言がなぜ三母音化傾向を示すのかを説明するためには、同時に本土方言がなぜ五母音のままなのかが統合的に説明される必要があると思われるのである。同様に、沖縄方言のハ行音がなぜp音であるのかを説明するためには、同時に本土方言のハ行音がなぜp音でないのかが統合的に説明されなくてはならないと考えられるのである。

沖縄方言に全くうとい筆者がこの問題について考えてみる資格をいくらかでももつのではないかと思うのは、この問題を右のように考えるからである。以下、筆者は、文献資料による日本語音韻史研究の立場からこの問題について、敢えて机上の論をひろげてみようと思うのであるが、めざすところは、沖縄方言そのものの解明ではなくて、日本語音韻史の解明である。従って、本論の題目は、理念としては、「日本語音韻史から見た沖縄方言の三母音化傾向とp音、また、沖縄方言の三母音化傾向とp音とから見た日本語音韻史」とでもあるべきものである。

二、三母音化傾向

(一)先学の説

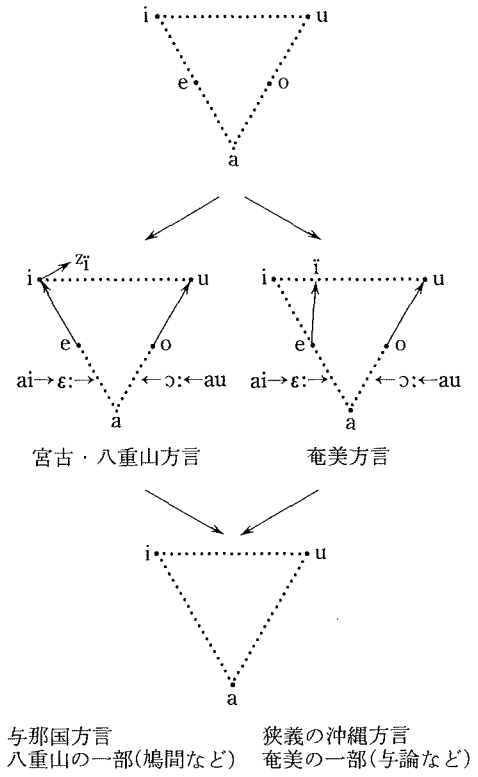
沖縄方言の三母音化傾向について、最も詳細な調査を行い、これに基いて、最もダイナミックな考察を展開されているのは、注1に引いた中本正智氏の高論である。この論考において、氏は、沖縄方言が三母音化傾向を示す原因を次の点に求めておられる。

①「eとoは、広母音のaと狭母音のi・uの中間的広さに位置して、いつの時代にも比較的不安定であり、狭い母音の方向へと変化する傾向のある副次的母音である。」（九九頁、原文横組み、以下同）

②「3母音への変化が円滑に実現される状況を醸成したのは、連母音の融合によってɔ:が発生して、oの周辺に音声上の類似母音が増加したことにあると考えられる。」（一〇〇頁）

③「eがiの方向へ推移する変化に拍車をかけたのは、o→uの場合と同様に融合母音（柳田注、中本氏はai から生まれたɛ:をあげておられる）の発生によって、eの周辺に、音声上の類似母音が増加したためであろう。」（一一〇頁）

氏の考察されたところを、筆者の立場から[注5]整理・図示すると次頁のようになる。中本氏は、沖縄方言に上代の甲乙の別が残存するという説に対しては極めて慎重に対応されているが、どちらかというとこれに否定的であって、沖縄方言の母音の現況がa・o・e・u・iの五母音から出てきたものとして説明できるという考え方をとっておられる。そして、



氏は、右に引いたように、沖縄方言の三母音化傾向が、融合母音ɔ:(<au) ɛ:(<ai)の発生によって起きたものであるとされる。従って、氏の解釈に従えば、沖縄方言の三母音化傾向は、京畿のことばで言えば、中世以後の言語から生まれたものということになる。

(1) ɔ:・ɛ:のこと

筆者は、沖縄方言の三母音化傾向が京畿のことばで言えば相当くだった時代の言語状況から生まれたものと見る、氏の解釈を妥当なものと考える。ただ、三母音化傾向生起の原因が融合母音ɔ:とɛ:の発生にあったとする考え方は、なお、これを発展的に検討する余地があるのではないかと考える。

1. ɔ:のこと

というのは、融合母音ɔ:の発生は長音o:をu:に追いやる力として強く働いたと見られるが、短音oの方をもすべてuに変えてしまうまでに強い力として働いたかどうかについて問題があるように思われるからである。

九州方言の多くの方言が、一般に、オ段開長音に当る音をo:で実現し、オ段合長音に当る音をu:で実現していることはよく知られているところである。[注6] 九州方言のこの状態が既に中世末期に認められることは、ロドリゲスの『日本大文典』によってうかがうことができる。この現象は、開合両長音の混同をくいとめるために、狭い合長音の方をより狭い母音u:にかえることによって起きたものと推定されている。[注7] しかしながら、九州方言においては、オ段合長音o:はu:に転じたけれども、短音oの方はuに転じるということはなかったのである。先のような原因によって、オ段合長音o:がウ段長音u:に転じる危機にさらされていた中世日本語においては、オ段・ウ段拗長音の表記にかなり顕著な動揺が認められるが、同時に短音oとuとの間にも、オ段拗長音の場合ほど顕著ではないけれども、動揺が認められる。[注8] 『日葡辞書』や抄物などにo∨uの例が見えることが注目されてきた。このような短音におけるoとuとの間の動揺のその源は古いにしても、[注9] この期におけるそれは、オ段合長音をウ段長音にせばめようとした力と無関係ではないであろう。日本の多くの方言では、オ段開合両長音の混同によって、オ段合長音のウ段長音化は衰滅し、短音oとuとの動揺も衰滅したが、九州方言の多くの方言においては、オ段合長音のウ段長音化が実現し、短音oのu音化は衰滅した。合長音はo:開長音ɔ:と区別されなくてはならなかったけれども、短音oの方は、短音ɔが存しないから、これと区別する必要がなく、従ってu音化の力も強く働かなかったためと考えられる。

ɔ: o:→u:

o u

沖縄方言は、与那国方言を除いて、一般に、九州方言と同じく、もとオ段開長音であった音はo:で実現し、もとオ段合長音であった音はu:(ũ)で実現する。平山輝男他『琉球先島方言の総合的研究』（明治書院　一九六七・三）の第4編語彙によって例示する。同書では一四地点の語形が示されているが、うち五地点（上から名瀬・首里・大浦・石垣・与那国の順に引く）のみ引く。

開音であった語[注10]

兄弟	kjo:de	tʃo:de:	kjo:dai	kjo:dai	ʔutuda
上手	dʒo:dʒi	dʒo:dʒi	dʒo:dʒi	dʒo:dzu	du:di
棒切レ	buri	bundʒiri	bo:giʒi	bo:nukiʲji	bi:giri
天井	tindʒo	tindʒo:	tindzo:	tindʒo:	tindu
道具	do:gu	do:gu	do:ʋ	do:ŋgu	duŋgu

合音であった語

今日	kju:	tʃu:	kju:	kju:	su:
昨日	k'inu	tʃinu:	tsinu	kinu	n:nu
十	tu	tu:	tu:	tu:	tu:

沖縄方言の多くの方言は、この点で九州方言と同じ状態を示しつつ、その上に短音oのu音化も実現しているのである。

九州方言において、オ段長音がウ段長音化しているのに対して、短音oがu音化を起こしていない理由を先のように考えてよいとするならば、長音・短音ともにオ段音がウ段音化している沖縄方言の場合には、更に何らかの力が働いたと考えた方がよいのではないか。

沖縄方言は、先のような見方では、オ段長音の開合の別を区別することを保持したかわりに、短音oとuとの区別を失った方言ということになる。どちらの区別がより重要であったかはにわかには断定しえないかも知れないけれども、oとuとの区別の方が重要であったと考えるのが自然であろう。oとuとの区別を失ってまで、オ段長音の開合の区別を保持する必要はなかったはずであるし、九州方言のような形で両方の区別を保持することもできたのである。そう考えると、オ段長音の開合の区別を保持するためにoがuになったとは考えにくいように思われるのである。

2. ɛ: のこと

こう考えると、他方、融合母音ɛ:(＜ai)の発生によってeがiに推移したとする考え方についても同様の問題があることになる。そして、この場合には、更に、それが原因であった可能性が一層薄いのではないかと思われる。というのは、先ず第一に、沖縄方言が三母音化傾向を起こしはじめた時期に、この方言でai連母音のɛ:長音化が起きていたのかどうかという問題があると思う。現代方言では、首里方言など沖縄本島中心部の方言を除いては、ai連母音は長音化せず原形を保つ傾向が強いようだからである。漢語だけでなく、和語もai連母音をとどめているところを見ても、原形aiの形が新しく生まれたものとは考えにくい。むしろ、長音形の方が新しく生まれたものではないかと見られる。平山『琉球先島方言の総合的研究』（先掲）から若干引用する。

粥	kai	ʔukeːmeː juʋ	kai	du	
灰	Fë	Feː	karapaï	pai	çiguŋ
地震	ne	neː	nai	nai	nai
毎日	çiːbiɲ	meːnitʃi	mainitsï	mainitsï	ʔitʲjiɲ
米	kumï	kumi	maï	mai	nni
野菜	jasë	jaseː	su:	jasai	dasai

ai連母音のェ段長音化がいつ、どのようにして起きていったのかについては、それが京畿のことばにおいては起きなかったらしいこともあっ

て、明らかでないことが多い。ai連母音のエ段長音化ならびにエ音化が九州方言において顕著であるところから、仮りに、沖縄方言においてもかつて盛んであった時代があったと仮定したとしても、第二に問題となるのは、そのエ段長音またはエ音が、もとからあったeをiにむかって動かせることになったかどうかということではないかと思う。オ段長音の場合は、ɔ:(ɔɔ)とo:(oo)とが音韻として対立していたから、これを区別する必要があったわけであるが、ai連母音から生まれた長音ɛ:は、仮りにei連母音から長音e:が生まれていたとして、音韻として両者が対立し、区別されていた時代があったのかどうか問題だからである。ɛ:(ɛɛ)とe:(ee)とを音韻として区別するような現代方言がないわけではない。[注12] しかし、文献資料による限り、日本語史においてそのような対立が一般的であったとは考えられないように思われる。

第三に、仮りに沖縄方言においてɛ:とe:とが音韻としての対立をもっていた時代があったとして、そのためにeがiにむかって動いたとするならば、オ段長音の開合の場合から考えて、e:がi:に転じるということが一般に起きていなくてはならないはずである。ところが、沖縄方言における、例えば「姪」の語形は、mïi(名瀬) mi:kkwa(首里)のようになっていて、[注13] e:がi:に動いたものではなく、meiのeがï又はiに転じたものと見られるのである。[注14]

(三) e→i

1. -aie>-ai, -aʃe>-aʃi

室町時代には、ア段音に後続する-ie、即ち-aieが-aiに転じるという変化が顕著である。[注15] 別稿では、[注16] 抄物から、例えば次のような例を引いた。

カイリミル(顧) カイル(蛙) カマイテ(構) マッカイサマ(返様) ……

広母音aの次には、裸の母音eが立ち得たから、「カヘリミル」「カヘル」「カマヘテ」「マッカヘサマ」は、ハ行転呼現象を経て、-aeの形に転じていたと見られるが、音声〔e〕と〔ie〕において〔ie〕が勢力を得てくると、このような場合にもieが立つようになり、-aieの形が生まれてきていたと見られる。そして、この-aieの形は-aiに転じていく傾向を顕著にしていったのである。そして、同様の変化は-oieにも起き、-oiに転じることが顕著であった。[注17]

エ段音がイ段音に転じていくという傾向は、中世においてはサ行音にも顕著であった。[注18] この「セ」が「シ」に転じるという変化は、別稿で推定したように、[注19] 「セ」の音がʃe(又はsie、なおʃeはsieに極めて近い)であったために、-aieの変化にひかれて、-asie>-asi(>aʃi)と変化したものと考えられる。つまり、ア(ヤ)行音とサ行音については、語中に立つ場合に限られるけれども、中世京畿の言語のeはiに転じていこうとしていたのである。筆者は、沖縄方言において、eがï又はiに転じている変化は、この変化につながるものとして把握されるものではないかと考える。ただ、ここで、次の問題が残ることを明記しておかなくてはならない。それは、セがシに転じている理由を右のように考えれば、語中のゼがジに転じた例も多く存していてよいはずであるのに、その確かな例が管見に入っていないということである。この点については後考を期さなくてはならない。

沖縄方言においては、ア(ヤ)行とサ行に限らず、あらゆる行のeがï又はiに転じている。そこで、沖縄方言においては、なぜ、ア(ヤ)行とサ行以外のeもï又はiに転じたのかが説明されなくてはならない。

2. 中世日本語のエ段音

(1)中世日本語のエ段音の音価

①先学の説

ここで想起されるのが、中世のエ段音の音価についての『日本語の歴史4』（平凡社）[注20]の指摘である。

九州の多くの方言では、サ行とザ行が、シェ・ジェと口蓋化するだけでなく、エ列のすべて、または大部分の子音が口蓋化する傾向がある。猫は、だから、ネコというよりは、ニェコ、目はミェというような発音である。こういう方言では、ア行もイェ［je］で、ほかの行のエ列音とよくそろう。

室町時代の中央語でも、シェ・ジェであり、イェでもあるから、おそらく、他の行も、いまの九州方言のようにミェ・ニェ……のような口蓋音だったのではないかとおもわれる（ただし現代九州方言をみても、この傾向は、特別に注意ぶかい音声学者でなければ気づかないようなものだし、もちろん、意味のちがいをあらわすのには無益な特徴なので、キリシタンの神父たちもこれを書きあらわすようなことはしなかったのだろう）。

（三〇八頁）

その後、ローランド・ラング博士も、エ段音にuが後続する場合の音韻変化に認められる事象と、朝鮮資料の諺文表記とから、中世日本語のエ段音節がすべて口蓋性を帯びていたことを推定している。[注21] エ段音にuが後続する場合の音韻変化に認められる事象というのは、例えば、keu（今日）がkiooになるように、それが拗長音に変化しているということである。この変化は、エ段音が口蓋音-ieであったと想定すると確かに自然に説明できるのである。

kieu>kieo>kioo

朝鮮資料『伊路波』『捷解新語』がエ段音を-ieを表わす諺文で表記していることはよく知られているところである。先に引いた『日本語の歴史』は、朝鮮資料のことに触れていないけれども、これをふまえていることは明らかである。だからこそ、口蓋音を表記していないキリシタン資料の表記を右のように解釈しているものと考えられる。中世日本語のエ段音が口蓋音であったとする説の根拠は三つにまとめられることになる。

○朝鮮資料が口蓋音でとらえている。

○現代九州方言に口蓋音が残っている。

○エ段音にuが後続する場合にそれが拗長音化している。

しかし、キリシタン資料が「エ」「セ」「ゼ」を除いてはエ段音を口蓋音としてとらえていないところから、一方では、浜田敦氏・森田武博士のように、朝鮮資料の諺文表記を口蓋音を表わしたものと見ない立場もある。[注22]

②筆者の立場

筆者は、現代九州方言に存する口蓋音と沖縄方言の三母音化傾向とをそう考えることによって統合的に説明しうるところから、中世日本語のエ段音が口蓋音であったと推定する。朝鮮資料の-yəも-yəiもともに-ieをとらえているものと解釈する立場をとる。

中世日本語のエ段音が、エ・セ・ゼだけでなく、すべての行にわたって口蓋性を帯びた音であったとするならば、沖縄方言におけるエ段音のイ段音化は、ここからの変化として容易に説明できることになるのである。もっとも、そう考えると、沖縄方言の三母音化傾向が説明できると同時に、京畿のことばにはなぜ沖縄方言と同じ変化が起きなかったのかという大きな疑問も生じてくることになる。筆者は、京畿のことばと沖縄方言との間にそのような違いが生じたのは、中世における口蓋化したエ段音の存在のしかたから来ているものと考える。キリシタン資料と朝鮮資料とのくいちがいもそう考えて自然に理解できるのである。

(2)口蓋化したエ段音の史的位置

①先学の説

先ず、口蓋性のェ段音を認める先学が、中世語資料に認められるその音をどのような存在のものととらえているかについて見る。『日本語の歴史』はそのことについて論じていないが、ラング博士は、上代語のェ段音の甲乙の区別が、子音の口蓋的な音と非口蓋的な音との対立であったとする説[注23]に従って、中世語のェ段音が口蓋性を帯びていることを、上代の口蓋的な音につながるものとしてとらえておられる。

②先学の説に対する疑問

上代における甲乙の音価のことについては後に考えることとし、中世におけるェ段音の音価について考える。筆者は、中世のェ段音（ェとセとゼを除く）の口蓋性が古くから存したものとは見ない方がよいと考える。そのような考え方に対しては次のような疑問が生じる。先ず、中世語に認められるセのシへの転化の原因を先に述べた筆者の推定のように考えてよいとするならば、ェ・セ以外のェ段音にイ段音への転化例が顕著でないという事実をどう説明するかという疑問がある。[注24]もう一つの疑問は、ェ段音が古く口蓋音であったとすると、それがなぜ後世非口蓋化したのかということである。そして、また、その非口蓋化の過程で、なぜセ・ゼだけがおそくまで口蓋音をとどめたのかということである。そのことが説明されなくては、この説は十分に説得力をもたないように思われる。ところが、この説はそのことについて説明しようとしていない。

さまざまな事象はェ段音の口蓋音が後に成立したものという解釈を導き出し、その解釈に立つと、また、さまざまな事象がうまく統合的に説明できるように、筆者には考えられる。

③筆者の解釈

⑦ェ・セ・ゼ

筆者は、中世語のェ・セ・ゼを除くェ段音の口蓋性を帯びている音は、中世に入って生じた新しいものと考える。-aiʲe>-ai, -asiʲe>-asi(>-aʃi)の変化がア(ャ)行とサ行にのみ顕著であることも、そう考えてうまく説明できる。そして、これらの変化が、中世になって、しかもその後期になって多く見えることも、ァ段音にʲeが後続することが増加したのが遅れて起きたと見られることから、うまく説明できると考える。[注25]ェ段音がもともと口蓋音であったのはサ行のセとザ行のゼとャ行のェとだけであったと筆者は考える。

①口蓋音ʃe・ʒeの由来

平安・鎌倉時代におけるサ行音の音価がどのようなものであったのかについては、サ行拗音の音価がからんでくるために、甚だやっかいである。馬淵和夫博士は、悉曇資料から、平安時代末期のサ行音を、

ʃa ʃi ʃu ʃe ʃo

と推定された。こう考えることによって、平安時代平仮名文の「すけんさ（修験者）」「すくせ（宿世）」などの表記がよく理解できるとされた。[注26]しかし、藤原公任撰の『大般若経字抄』（一一六四年写）に「サ」と「シャ」の二種の表記が見えるところから、sa・su・soの成立について次のように述べられた。[注27]

梵語のśṣ・sの発音を区別しようとしたり、また、漢字音の学習で、歯音の一等と他の等とを区別しようとしたりしたことの結果、在来の[ʃ]のほかに[s]が発生してきて、

ʃa ʃi ʃu ʃe ʃo

sa su so

という一系統が成立したかとも思われる。そうすると、『悉曇口伝』のサの音についての記述は、まだ代表的な方の[ʃa]についてのものかとも解されるのである。

なおサ行音については多くの考えるべき問題がある。（七〇頁）

奥村三雄博士は、サ行音の音価についての馬淵博士説に従いながら、拗音との関係については次のように述べられている。[注28]

あるいは、次の様な考え方を採るべきであろうか。すなわち、当時のサ行拗音表記「シャ(沙)・シュ(燒)・ショ(渚)」などは、現代語の拗音と異なり、むしろ、ʃʲia·ʃʲiu·ʃʲio に近い音だったため、口蓋子音をふくむサ行音の「サ(ʃa)・ス(ʃu)・ソ(ʃo)」などと対立し得た。(一二二頁)

筆者は平安時代一〇世紀頃におけるサ行音は、

ʃa ʃi ʃu ʃe ʃo

であったと推定する。[注29] そして、この後、筆者の考えるシラビーム後期[注30]に入ると、今まで一シラビームとして発音されていた ʃia·ʃiu·ʃio が拗音となり、一モーラ ʃa·ʃu·ʃo と発音されることとなったと考える。ここに、エ段の拗音が生じなかったのは、和語において語頭にeの立つ語が少なく、-ie のシラビームが殆ど存しなかったことによるものと考えられる。こうして拗音が成立すると、サ行音とサ行拗音とは、ア・ウ・オ段において衝突することとなるため、これを避けようとして、サ行音の方が、この三か所において、非口蓋化を起こしたものと考える。衝突を避けるために非口蓋音 sa·su·so が選ばれたのは、他の拗音対直音、kʲa·kʲu·kʲo 対 ka·ku·ko などにならったものと考えられる。

サ行拗音	ʃia	ʃiu	ʃio	→	ʃa	ʃu	ʃo
サ行音	ʃa	ʃi	ʃu	ʃe	ʃo	→	sa	ʃi	su	ʃe	so

このような考え方は、拗音の成立についての考え方は異るけれども、浜田敦氏が早く示されたところである。[注31] こう考えることによって、サ行音の非口蓋化の原因も説明でき、非口蓋化がなぜサ・ス・ソの三段にだけ起きたのかも説明することができる。こうして、キリシタン資料が語るように、京畿のことばのシ・セは、中世末期まで ʃi·ʃe であったのである。ジ・ゼについても同様に考えることができる。

㋒ネ(ɲie)

このようにセ・ゼは古くから口蓋音 ʃe·ʒe であったのであるが、エ段音のうち「ネ」にも口蓋音 ɲie が早くから生じていた。それは連声の場合であって、よく知られているようにロドリゲス『日本大文典』に次のような記事がある。

N字の後にYa(や)、ye(え)、y(い)、yo(よ)、yu(ゆ)の音節が続く場合には、Nha(ニャ)、nhe(ニェ)、nhi(ニ)、nho(ニョ)、nhu(ニュ)のやうに発音されなければならない。それを書くのには、語を区別する為にya(や)、ye(え)などと書くけれども。例へば、Sanya(山野)はSannha(サンニャ)と発音する。Xinnhô(シンニョー)、Guennhe fôin(ゲンニェホーイン)、Xennhô(シェンニョー)、Cannyô(カンニョー)、Bequennha(ベケンニャ)はXinyô(信用)、Guenye(玄恵)、Xenyô(専用)、Canyô(肝要)、Bequenya(べけんや)である。(土井博士訳本六三六頁)

筆者の立場からすると、室町時代においては、音声のレベルで〔e〕と〔ie〕とが存したが、現代語でもnに後続する場合には〔ie〕が実現しやすいところから見て、これらの語が連声を起こす前の形は-nie であったと見られる。その形が連声を起こすと当然-nnie になったはずで、ここに口蓋音 ɲie が実現していたことは確かである。

㋓セ・ゼ以外のエ段音の口蓋化

ところで、中世においては、下二段活用動詞を契機に〔ie〕が勢力をのばしていったものと見られる。[注32] ʃe(sie に極めて近い)・ʒe(zie に極めて近い)が存し、nie が存するところへ、アヤ行のエにおいて ie が勢力をのばしてくると、これにひかれて、アヤ、サ・ザ、ナ行以外の行のエ段音も口蓋化を起こす傾向が出てきたのではないか。朝鮮版『伊路

波』が伝えるkie· Φie·mieなどの音は、そのようにして新しく生まれた音であったと、筆者は考える。

ア・ヤ行　ieが勢力をのばす

サ・ザ行　ʃe· ʒe

ナ行　連声の場合nie

その他の行　口蓋化kie·tie· Φie……

㋔口蓋化音の衰退

しかし、エ・セ・ゼと連声のネ以外の口蓋化したエ段音は、右のような性格の音であったから、京畿のことばでは、十分に定着する以前に、〔ie〕の衰退にひかれて、衰滅にむかったのではないか。キリシタン資料が、エ・セ・ゼ以外のエ段音を非口蓋音を表わす綴りをもって書いているのは、京畿のエ段音が、少なくともその標準的な音が非口蓋音になっていたためであると考えられる。そして、キリシタン資料よりも成立がさがる『捷解新語』が口蓋音を表記しているのは、現代方言と同じく口蓋音をとどめていた九州方言の発音をとらえているものと考える。『捷解新語』の口蓋音が九州方言のそれをとらえたものとする解釈は早くラング博士が示されたところであって、筆者はその点についてはラング説に従う。

しかし、このように考えるためには、キリシタン資料の表記から、その当時のエ段音（エ・セ・ゼならびに連声のネを除く）をそのまま非口蓋音と考えてよいということを論証しておかなくてはならない。ラング博士など多くの研究者はキリシタン資料の表記をそのまま非口蓋音を表わすものとしているけれども、先に引いた『日本語の歴史』のように、口蓋性が注意深い人でなければ気づかないようなものであり、また、意味の違いを表わすのには無益な特徴であったために、キリシタンが書き表わさなかったという考え方もできるからである。しかし、筆者は、結論を先に述べれば、キリシタン資料のqe·te·neなどは表記通り非口蓋音を表わしていると言えると考える。先にロドリゲス『日本大文典』から連声のネの発音に関する部分を引いたが、実はその部分の後には更に次の一節が見えるのである。

又、Yen（えん）が続く場合にはNen（ネン）と発音される。例えば、Innen（インネン）はInyen（因縁）である。（土井博士訳本六三六頁）

この記事は、ロドリゲス『日本小文典』には次のように見え、その言うところが一層はっきりしてくる。

（上略）Quando depois do mesmo, N, se seguem as syllabas, *Ya, Ye, Yo, Yu.* Estas se pronunciam, *Nha, Nhe, Nho, Nhu.* Vt, *Anya, Genya, Conya.* pronunciam se, *Annha, Ghênha, Connha* : *Ghenye, Fanyei, Rinye,* pronunciam se, *Ghennhe, Fannhei, Rinnhe* : mas, *Ynyen,* pronuncia se, *Ynnen* ;（下略）（12v.）

この記事については、早く土井忠生博士が注目され、次のように述べられている。[注33]

エはすべてyeの音であったからニェnheとなった。例えば、輪廻（リンニェ）・繁栄（ハンエイ）・玄慧（ゲンエ）法印。「因縁」は「インネン」とのみ言い「インニェン」とは言わなかった。

ここで注目されるのは、「玄恵・繁栄・輪廻」と同じく、当然口蓋音nieであってよいはずの「因縁」について、それがneであったとしていることである。この記事をもって見れば、非口蓋音neが存していたことは明らかであり、口蓋音nieは連声の場合に実現することがある音であり、それ以外のエ段音は非口蓋音neであったと考えるのが自然である。そして、「ネ」についてそのように考えられるならば、それ以外のエ段音も非口蓋音であったと考えられる。このように考えてよいと

して、口蓋音であってよいはずの「因縁」の「ネ」はなぜ非口蓋音だったのであろうか。キリシタンの頃の京畿のことばにおいては、エ・セ・ゼを除くエ段音は非口蓋音となっており、連声の場合の「ネ」にのみ、その成立事情から口蓋音nie̯が生きのびていたものと見られる。しかし、このneとnie̯とは音声のレベルでは異なる音ではあっても、音韻としては一個の単位であったから、連声の場合の口蓋音nie̯も、他のケースの非口蓋化にひかれて、非口蓋音に移行していたのであろう。「因縁」は、なんらかの事情でいち早く非口蓋化していたのではないかと考えられる。

このようにキリシタン資料のエ段音の表記が、表記通り非口蓋音を表わしているものと考えて、キリシタンがエ・セ・ゼのみye·xe·jeと表記しているという事実も自然に理解できる。

室町時代末期においては、〔ie̯〕は、-aie̯>-aiの変化による二段活用動詞の一段化を契機として、衰滅にむかっていた。二段活用動詞の一段化は既にキリシタン資料の時代に起きていたから、〔ie̯〕の衰退も起きており、これに連動して、十分に定着していなかったkie̯·Φie̯·mie̯などは、京畿のことばにおいて、衰退にむかっていたのではないか。京畿のことばにおいて、これが完全に衰退するのは江戸時代に入ってからであったかも知れないが、それへむかっての変化は中世に起きており、少なくとも標準的な音は非口蓋音の方だったのではないかと考えられる。キリシタン資料はそのような京畿のことばの状態をとらえているものと考えられる。中世末期京畿のことばに生きていたサ行のʃeの音が江戸時代に入って非口蓋化するのは、〔ie̯〕の衰滅と、kie̯·Φie̯·mie̯などのke·Φe(he)·meへの回帰にひかれたものと考えてうまく説明できる。〔ie̯〕が衰退をはじめると、先ず、十分定着していなかったkie̯·Φie̯·mie̯などが衰退し、ついで、それがʃeに及んだものと考えられる。

㋕e+u>ioo

筆者は、以上のように、エ・セ・ゼ以外のエ段音の口蓋音を、新しく成立し、京畿のことばにおいては定着しないまま衰退したものと考えるのであるが、この考えに立つ時、ラング博士が指摘したkeu(今日)などが拗長音化することはどのように説明され得るであろうか。この場合、エ段音が口蓋音であったと考えた方が、拗長音化を説明しやすいように見える。「今日」に例をとって示すと、エ段音を口蓋音と見た前者の方が自然な変化に見える。

kie̯u>kie̯o>kie̯oo

keu>keo>kioo

しかし、筆者の立場からは、シラビーム言語後期においては、〈e－o〉という〈狭－広〉の母音連続が許容されなかったために、それがkeioとなり、この形を経てkie̯ooになったものと考える。ここで、「ケヨ」の形で定着しなかったのは、このようなケースが下二段活用動詞に推量の助動詞「ウ」が接続する場合に多く、この場合においては、他の活用形式の動詞の場合が長音になっていたため、また、-eio̯の形では命令形と衝突するために、長音化したのではないかと考える。

ikau(行カウ)　>ikao>ikɔɔ

kou(来ウ)　>koo

ukeu(受ケウ)　>ukeio̯>ukio̯o

このように推定する時、筆者は、「今日(ケフ)」などの拗長音化の時期、推量の助動詞「ウ」の長音形成立の時期よりも、口蓋化音kie̯·tie̯·Φie̯などが成立した時期の方が新しいと見ている。〔ie̯〕の勢力拡大による口蓋化音kie̯·tie̯·Φie̯などの成立時期は厳密には明らかでないが、下二段活用動詞のヤ行化を契機に〔ie̯〕が勢力を拡大したとすれば、少な

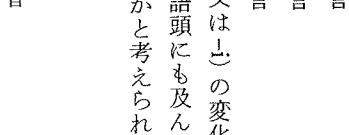
くとも「今日」などの拗長音化、推量の助動詞「ウ」の長音化よりも新しいことであると考えられる。口蓋音kie·tie·Φieなどの成立が新しいことは、ti·tuの破擦音化の時期や四つ仮名混同の時期からも推量されると考えるが、そのことについては後に論ずることとする。

3. 沖縄方言における-ie>-i(又は-i)

(1) -ie>-i(又は-i)

右に見たような京畿における変化に対して、九州方言では、二段活用動詞の一段化が遅れ、従って〔ie〕の勢力も衰えなかったから、口蓋音が生きのびていたのであろう。キリシタン資料よりも新しい成立の『捷解新語』が口蓋音をとらえているのはラング説のように九州方言のそれをとらえているためと見られる。九州方言の或る方言が口蓋音を今日にまで伝えていることは、先に引いたように『日本語の歴史』などが指摘するところである。

これに対して、沖縄方言は、この-ie·ʃe (-sie)·-kie·-tie·-nieなどを、中世日本語の-aie>-ai·-aʃe (-asie) >-asi (>-aʃi)などと同じく、-ki·-ti·-ni(又は-ki(-tʃi)·-tʃi·-ni)に変化させた方言ではないかと、筆者は考える。このように考えると、本土方言・九州方言・沖縄方言の三者を、中世日本語から統合的に無理なくとらえることができるのである。



沖縄方言におけるこの、-ie>i(又は-i)の変化は、はじめ語中に起きたが、語中の-ieが消滅すると、語頭にも及んで、語頭のe·-ieもi·-i(又はi·-i)に変わったのではないかと考えられる。

(2) i-と-i

沖縄方言における三母音化傾向のうち、ェ段音のイ段音化は、基本的には、このようにして、実現していったのではないかと考えられるが、細部については、なお考えなくてはならない問題がある。それは、ェ段音のイ段音への変化が奄美方言と宮古・八重山方言とで異なることである。即ち、奄美方言ではeがiに転じ、iがiでとどまっているのに対して、宮古・八重山方言ではeがiに転じ、iがïに転じているのである。この、奄美方言における-iと-i、宮古・八重山方言における-iと-ʐïは、ともに音韻として対立しているものであるから、かつて存した-eと-iとの別を保持しようとしているものであることは間違いないであろう。そう考えてよいならば、奄美方言と宮古・八重山方言との違いは、これらの方言がともにまだ五母音であった時に、狭母音iがiのままでとどまっていた(奄美方言)か、ある変化を受けてïに変わっていた(宮古・八重山方言)かに起因するのではないかと考えられる。イ段音は、本土方言でも、サ行音がʃiでとどまり、タ行音でti>tʃiの変化が起きており、ハ行音でΦi>çiの変化が起きている。又、東北方言でも、カ行音でki>kiʃ>tʃiの変化が起きている。これらの変化(それは口蓋化ととらえられる)がなぜ起きたのかについては後に扱うが、摩擦的噪音-ʐïは、特にtʃi(<ti, <ki)につながる性格をもつ。宮古・八重山方言における-i>-ʐïの変化は、これら一連の変化につながるものだったのではないか。そう考えてよいならば、宮古・八重山方言においては、iがïに転じているところに、(-)ie>(-)iの変化が起き、iがiのままでとどまっていた奄美方言においては(-)ie>(-)iïの変化が起きたのではないかと考えられる。奄美方言においてェから転じたイがïであるのは、それが-ieから転じたものと考えてよく理解できる。

(3) 東北方言

沖縄方言に見るような三母音化傾向そのものは、日本語方言の他の方

言には認められないが、これに対応すると見られる現象は東北方言に存する。そのことは既に佐藤喜代治博士が示唆されている。[注34] 東北方言においては、方言によっては語頭においてiとeと対立をもつ方言も存するようであるが、[注35] 一般にiとeとの音韻としての対立が存しないと言われる。[注36] 東北方言におけるこのような状態は、これを沖縄方言との対比の視点から見る時は、やはりi̯e>iの変化がもたらしたものではないかと考えられる。そして、東北方言では、アヤ行以外の行では、イ段音とエ段音とが音韻的対立を示すが、音声的には、両者が近い音として実現し、語彙的にɨ̞iがɨ̞eに転化した語が認められるという。[注37] これも、かつて、-i̯eがɨ̞iにむかって動きながら、音韻としては対立を保っているという名残りではないであろうか。

㈣ o→u

沖縄方言における三母音化傾向のうち、エ段音が存しなくなった原因が右述のようであったとすると、オ段音が存しなくなった原因もこれと同様に起きたのではないかということが、まず想定される。

ma̯osu(申ス)がmausuに変わった例などから見て、語中のu̯oがuに転じていったことは十分に想定しうるところである。しかしながら、それは、(ア)ワ行音の場合に想定できることであって、それ以外の行のオ段音については想定しえないように思われる。エ段音ki̯e·ni̯e·mi̯eなどの場合と同じように、オ段音の方もku̯o·nu̯o·mu̯oなどであったと推定する説もあるが、[注38] 奥村三雄博士が、「いろんな文献や方言資料を見ても、この考え方を支持する様な徴証は、ほとんど見当らないのである。」と述べられているように、[注39] オ段音はko·no·moなどであったと見るべきではないかと思われるのである。

それでは、沖縄方言において、オ段音はどのようにしてウ段音に吸収されてしまったのであろうか。筆者は、これには五つの原因が複合してはたらいたと考える。

(1)古くオ段音とウ段音とが相互に「交替」することがあった。[注40]

(2)語中の(ア)ワ行のu̯oがuに変化する動きがあった。

(3)オ段開長音o:が音韻として確立したために、オ段開合長音を区別する必要から、合長音がウ段長音にむかって狭まる動きが生じ、これにひかれてオ段音がウ段音に動いた。(中本氏はこれを原因とされた。)

(4)「扇グ」などのように、-auが開長音化する過程で-aoでとどまっていた語があり、そのためu・o両形でゆれている語があった。[注41]

(5)対照的な位置にある半広母音エ段音がイ段音に動いたために、右の(1)〜(4)によって起きていたところのオ段音がウ段音にむかって動く傾向が、完全に実現することとなった。

(1)(2)(3)(4)だけでは三母音化傾向は起きず、(5)によってはじめてそれが起きたというのが、筆者の解釈である。(1)〜(4)は、沖縄方言だけでなく、すべての日本語に起きていたことであったと見られるのであって、沖縄方言以外の方言では(5)が起きなかったために、三母音化傾向が起きなかったものと考えられる。

このように、e→iの場合と、o→uの場合とでは、その生起の原因が異なっていたものと考えられるのである。前者の場合にi・ï を経由してiになっているのに対して、後者の場合、例えばu・ü を経由するといったことがなく(ス・ツ・ズ・ヅがiに転じる過程のそれは別のケースである)、両ケースが対照的になっていないのも、右のように考えてよく理解できるように思われる。

なお、オ段音がウ段音に変化して、もとからのウ段音との区別がなくなっている沖縄方言にあって、サ・ダ・タ・ダ行のウ段音がイ段音に転

じていることに触れておく。このことについては、早く伊波普猷氏が指摘され、[注42] 周知のところである。この変化について注目されるのは、柴田武博士が、同じ変化が出雲方言でも認められることを指摘されている[注43]ことである。出雲方言と同じく「ズーズー弁」である東北方言の多くの方言においてシ・ス・シュ、ジ・ズ・ジュがそれぞれ合一していることも人のよく知るところである。[注44] このような変化は全国的に起きていたものかと見られる。あるいは中世末期の京畿のことばにおいても起きていたか。『片言』からその断片かと見られる例を引く。

一団扇を　○うつわ
一畜生といふべきを　○つくしやう
一粽を　○つまき
一みつ鉄輪といふべきを　○みつかなを同じくみつ口をみちくち
一傍尓を　○ほうず
一純熟を　○じゆんづく

サ・ザ・タ・ダ行音にこのような変化が起きているのは、サ・ザ・タ・ダ行音の場合、ス・ズ・ツ・ヅが口蓋化して、ʃu・ʒu・tʃu・dʒu音となりやすかったために、ʃu (sʲu) >si, ʒu (zʲu) >zi, tʃu>tʃi, dʒu>dʒi の変化を起こしやすかったものと考えられる。なぜこのような口蓋化が進行したかについては後に扱う。

(五)イ段・ウ段の子音

(1)口蓋化

以上のように、沖縄方言の三母音化傾向は、京畿のことばの中世後期の状態から生じたのではないかと考えられる。中世後期の音韻状態からすれば本土方言も同じく三母音化傾向にむかう可能性をいくらかはもっていたのであった。ところが、本土方言においては、ェ段音の口蓋音が定着することなくほろびたために、三母音化傾向が起きなかったのではないかと考えられるのである。

それにしても、沖縄方言において三母音化傾向が実現しえたのは、先学が指摘し、よく知られているように、一つには、eがiに、oがuに合流しても、その区別を子音などが保持することがあったことにもよると考えられる。[注45] 伊波普猷氏によれば、例えば、首里を中心とした狭義の沖縄方言においては、本来のイ段音が口蓋化しており、ェ段から来たそれは原音を保っているという。

琉球語（以下首里方言を中心とした沖縄方言の意に用ゐる）では、（中略）ェ列から来た子音が、原価を保存するに反して、在来のイ列の子音は、口蓋化（パラタリゾーレン）（若しくは湿音化）するので、さうした所に、今は区別し難くなつてゐる此の両母音の間に、かつて幾分開きのあつた痕跡が見えてゐる。即ち、「k+i」(ki:　毛（け）)・「g+i」(ka:gi影)・「s+i」(karasi貸せ)・「w+i」(wi:yun酔（ゑ）ふ)・「n+i」(nni胸)・「r+i」(turi取れ) 等に対して、「ch+i」(chin着物（きぬ）)・「dj+i」(kadjiri限り)・「sh+i」(karashi貸し)・「y+i」(yiyun坐る)・「ṅ+i」(ṅiyun似（に）る)・「y+i」(tuyi取り) 等がある。（但、ṅiがyiに変ずるのは、語腹にある場合に限る。）（二三頁）

三母音化傾向と口蓋化との二つの関係についての伊波氏の考え方の一面を受けて、三母音化が起きたために、その区別を補う形で子音に口蓋化が起きたとする考え方がある。しかし、筆者は、そのような考え方には賛同しがたい。一旦eがiに合流し、oがuに合流してしまえば、それは修復のしようのないことである。そのことについては、服部四郎博士が指摘されているところで、[注46] 筆者は博士の解釈に従うものである。三母音化傾向による混乱を防ぐために、子音の方で区別しようとして、口蓋化がより強力に進んだということはあっても、口蓋化自体は三母音化傾

向よりも先にはじまっていたものと筆者は考える。高橋俊三氏は、『おもろさうし』の口蓋化の例を検討され、

原因は子音の前後のｉ母音の影響であって、母音ｅ、ｏが各々ｉ、ｕに変化することによって生ずる混乱を避けるためではない。

とされている。[注47] 従うべき解釈と思われる。

なお、宮古・八重山方言においては、右のような口蓋化が起きていないようであるが、本来のイ段音が転じたïがそれに対応するものと考えられる。

先に筆者は、宮古・八重山方言のïを、本土方言のtʃi·çi、東北方言のtʃi(＞ki＞ki)と同じ変化が起きたものと考えた。狭義の沖縄方言におけるイ段・ウ段の口蓋化音も、本土方言におけるti＞tʃi、Φi＞çiの変化に対応するものではないかと筆者は考える。ti·tuは朝鮮資料やキリシタン資料の表記から一六世紀頃にtʃi·tsuになったのではないかとされている。Φiがçiになった時期は明らかでないが、同じ頃既にその変化が起きていたのではないかと見られる。キリシタン資料はfiで表記するけれども、「紐」を「しも」と言ったように、「ヒ」をʃiにとらえた例が散見するから、「ヒ」はçiになっていたと見られる。[注48] ところで、われわれは、ti·tuがtʃi·tsuにかわった時期についての考察には多くの成果をもっているけれども、なぜti·tuがtʃi·tsuに転じ、Φiがçiになったのか、そして、また、それがほかならぬその時期に起こったのかについては解釈をもっていないように思う。tiの破擦音化は朝鮮語においても起きているようであるから、変化としては起きやすいものであったと見られるけれども、筆者は、中世後期にェ段音が口蓋化したことが、口蓋化を起こしやすかったイ段音を口蓋化させ、京畿方言ではtʃi·çiを生み出したのではないかと考える。ti＞tʃi, Φi＞çiの変化がほかならぬ一六世紀に起きているということは、そのように考えてよく理解できるように思われるのである。そして、ェ段音の口蓋音が長く生きのびていた東北方言では更にki＞kii＞tʃiを起こし、沖縄方言では多くのイ段音、更にはア・ウ・オ段音に口蓋音を生じたものと考える。ただ、ェ段音の口蓋音を長く保持している九州方言においても口蓋化が起きていてもよいはずであるが、鹿児島県南部にキャ＞チャ、キョ＞チョの例が報告されている[注49]けれども、その他の地方における口蓋化がどのようになっているのか筆者は知らない。方言研究者の教示にまちたい。

ともあれ、右のように考えると、東北方言や沖縄方言に口蓋化が顕著であり、それ以外の本土方言に口蓋化が盛んでない理由が説明できるのではないかと考えられる。

従来は、一般にti＞tʃi, tu＞tsuの変化を一括して破擦音化として注目してきたけれども、先ず、ti＞tʃiの変化を口蓋化として注目すべきだったのではないかと筆者は考える。チとツとどちらが先に破擦音化したのかについては明らかでないが、[注50] 四つ仮名混同の場合から見て、tiに口蓋化が起きて破擦音化が起きたのではないか。そして、やがてtuにも口蓋化が及んだが、これが口蓋化を起こすと拗音tʃuと衝突してしまうために、京畿方言などでは破擦音tsuになったのではないか。沖縄方言や東北方言や出雲方言でtʃuへの口蓋化が起き、やがてそれがtʃiになってしまっていることについては先に見たところである。

右に触れたように、いわゆる四つ仮名の混同も、ェ段音の口蓋化によってひきおこされたものではないかと推定される。[注51] ダ行のェ段音deが口蓋化してdʒe(＞dʒe)となると、これにひかれて、diがdʒiとなり、ザ行のzïに近づいて行ったものと考えられる。そして、タ行の場合と同じようにduもdzuに破擦音化したものと見られる。四つ仮名の混同がヂ・ジからはじまり、ヅ・ズが遅れることは指摘されてきたところである。[注52]

ところで、diが口蓋化してdʒiとなり、duが口蓋化の動きの中で破擦音化してdzuとなっても、その限りにおいてはdʒi・ʒi'、dzu・zuによって四つ仮名の区別は保たれている。京畿などのことばにおいて、これが混同するのは、ェ段音の口蓋音が衰退したために、dʒi・dzuも不安定な存在となり、ʒi・zu（ただし、語頭には音声としてdʒi・dzuを残す）に転じ、四つ仮名の混同を見たのではないか。ェ段音の口蓋音を残している九州方言ではdʒi・dzuも安定しており、四つ仮名の区別が保存されたものと解される。そのように考えると、tʃi・tsuの方も、ェ段音の口蓋音の衰退とともに不安定な存在になったと考えざるを得ない。それにもかかわらず、tʃi・tsuの方はʃi・suと混同することもなく今日まで伝わっているのはなぜなのであろうか。ェ段音の口蓋音が衰退したにもかかわらず、tʃi・tsuが安定していたわけではなかったものと見られる。既に指摘されているように、少なくともtsuは、室町時代末期の京畿のことばではsuへの移行の動きを見せていたのである。[注53] しかし、ツとス、チとシとが同音に帰すると衝突する語があまりにも多いために、tʃi・tsuの場合には、dʒi・dzuの場合のような変化がそれ以上進行しなかったものと考えられる。高知県のある方言で、ツをtuに、ヂ・ヅをdi・duに実現する傾向があるのは、不安定で、サ行音・ザ行音に近づいて行こうとする音に安定を与えようとして起きたものではないか。

ところで、東北方言や沖縄方言の多くの方言ではヂ・ジ・ヅ・ズを区別しないようである。九州方言において四つ仮名の発音が区別されているところからすれば、その言語史的位置から見て、これらの方言においてもそれが区別されていてもよさそうに思われるにもかかわらず、区別されていないのはなぜなのか。これは、先に触れたように、この両方言でザ・ダ行のuがiに合一していることによるのではないかと見られる。四つ仮名の混同はヂ・ジの方に早くはじまったのであって、ヅ・ズがヂ・ジに合流してしまった方言では、混同が急速に進んでしまったのではないかと見られる。

長く両唇摩擦音Φであったハ行音がç・hに変わっていったのも、ェ段音の口蓋化がその主たる原因ではないかと推定されるが、そのことについては、後に考えることとする。

(2)有気音・無気音

三母音化傾向の実現にかかわったと見られる子音の問題に、口蓋化とともにもう一つ無気喉頭化音と有気非喉頭化音との対立がある。即ち、沖縄方言のある方言では、主としてp・t・kの子音に無気喉頭化音p'・t'・k'と有気非喉頭化音p‘・t‘・k‘の音韻的対立があり、一般に、本来のi・u母音が後続する時には前者の子音が立ち、a母音とe・oから転じたi・u母音とが後続する時には後者の子音が立つ。このことによって、沖縄方言の或る方言では、失われたi・e、u・oのそれぞれの区別が、子音の違いによって保持されているというのである。

しかし、この場合も、三母音化が実現した後にそれを補うために子音に変化が起きたのではなく、子音の上の変化は三母音化とは別に存しており、三母音化の進行とともに、それが生かされていくことになったものと考えるべきであろう。

有気音と無気音との対立が、沖縄方言を除いては日本語方言において音韻的対立として認められないために、その研究が進んでいないが、近時、室町時代のk・t・pについて、音声のレベルで有気音と無気音とが存したことが明らかにされてきた。中国資料による平弥悠紀氏の研究[注54]は、語頭と語中、kとtとの比較で、後続の母音の違いによる現われ方は問題にされていない。それは、用例数がさほど多くないために後続母音の違いによる比較に有意味な傾向を認めがたかったためではないかと見られる。しかし、現代共通語などにおいても、有気音が、後続母音が

広母音aである場合に多いところから見ても、後続母音が広い母音の場合に有気音に、後続母音が狭い場合に無気音になりやすかったものと見てよいのではないか。また、『日葡辞書』に見えるパ行音ではじまる擬声擬態語は、次の八語であるが、そのうちパラリトだけハラリトの形が並記されているのが注目される。

PAppato. Pararito. 1, fararito. Patto. Paxxito. PInpin. Pixxito. POnpon. 1, Ponponto. Poppoto.

筆者の解釈では、これらのp音は古いp音が残存しているものと考えられるが、ハ行音がp音からΦ音に変わると、p音形のほかにΦ音形が生まれ、ハラリトのような形が生まれたものと考えられる。[注55] この時、『日葡辞書』がパラリトにのみΦ音形を掲出しているのは、広母音が後続するpaの場合にΦa形を生み出しやすかったからではないかと考えられる。即ち、少なくともpaの場合には有気音で実現しやすかったのではないかと推定される。[注56]

以上要するに、有気音と無気音との違いは、中世日本語において音声のレベルで存しており、三母音化傾向が進んでいった沖縄方言においては、その欠を補うために、それが音韻的対立をなすようになり、音韻的対立が確立すると三母音化傾向も進行していったものと解される。このような音韻的対立が生じやすいことについては服部四郎博士が指摘されているところである。[注57]

(六)『おもろさうし』の母音

1. 三母音説と五母音説

以上のように、筆者の推定によれば、沖縄方言の三母音化傾向は京畿のことばの中世語、室町時代の言語状態から生まれたものではないかと考えられるのである。この推定からすれば、『おもろさうし』(巻一＝一五三二年成、巻二＝一六一三年成、巻三以下＝一六二三年成)の母音が三母音化傾向を示しているのかどうかが注目されるところである。

『おもろさうし』に記録されたことばが五母音であるのか、三母音化傾向を示しているのかについては説が分かれている。外間守善博士は、

方言化への傾斜を始めた一二世紀頃から母音変化の様相を胚胎していたかどうか、あかしの立てようがないが、私は、文献時代(一五世紀末以後)に入る直前頃にはかなりな程度まで三母音化現象が進んでいたに違いないと考えている。

として、『おもろさうし』に見える、

まはへ(真南風)→まはい
こへ(声)→こい
おび(帯)→うび
きも(肝)→きむ

などの例をあげられた。[注58] 『おもろさうし』にはエ段の仮名とオ段の仮名が多数存するわけであるが、博士はこれを、実際の発音を記したものではなく、仮名遣いによるものと解しておられる。そして、「婿」を「もこ」と表記しているような例が見えるのは、規範意識による類推仮名遣い(「おもろ表記」)であるとされている。

これに対して、『おもろさうし』の時代の母音を五母音であったとする考え方も次第に提出されるようになっている。早くは、伊波普猷氏が、五母音であったとは述べていないけれども、イとエ、ウとオとに違いがあったとしておられる。[注59]

現代琉球語には、エ列とオ列は欠けてゐるのに、オモロを表記するに、エ列とオ列との平仮名が用ゐてあるのを変だと思ふ人があるかも知れぬが、この点は琉球語に於ける音韻変化の激しい現象を目撃したら、容易く頷かれよう。沖縄島の北部の方言では、エ列から来

た音節と在来のイ列のそれとの間には、多少の開きがあり、首里語でも一世紀前までは、幾分の差異があつたといふから（「琉球語の母音統計」参照）、平仮名を借りてオモロを表記した頃には、かなりの開きがあつたと見ていゝ。琉球に於ける平仮名の採用の時期は、鎌倉以前に溯る事が出来るから、二国語の母音の価値に余り開きの無かつた時代には、琉球人は大した苦心なしに自国語を写出したに違ひない。そして彼等の子孫は、其後音韻が著しく変化したにも拘らず、この写語法を蹈襲して、今日に至ったと見ることが出来よう。

しかし、この論については、『おもろさうし』のエ段・オ段の仮名をそのまま発音を表わしたものと見ることができるのかどうかについて問題があり、外間博士のような見解もあり得ることになる。そのような困難の中で、注目されるのは仲宗根政善氏による音韻変化に手掛りを求めた発言である。氏は、『おもろさうし』に見える「おわる」という語について論じた論文[注60]の中で、補助動詞「おわる」接尾辞「思い」が、連用形活用語尾の母音がiである動詞につく時には、「よわる」「よもい」となり、それがeである動詞につく時には「わる」「もい」となっていることに注目して、この融合が起きた頃にはiとeとの区別が存したことに論及しておられる。また、「て」が『おもろさうし』で「ちへ」「ちゑ」と口蓋音で表記されて、「ち」と表記されていない点からもeはまだiになっていなかったとされている。ただし、前者については、その融合の時期をただちに『おもろさうし』の時期と見なすわけにはいかないと思われる。

2. エとイ

『おもろさうし』の母音についてこれを正面から論じたのは高橋俊三氏で、氏は『おもろさうし』に見えるイ段とエ段の仮名の混乱と見られそうな例を検討して、次の結論を出されている。[注61]

以上、エ段の仮名とイ段の仮名の混同と思われそうなものを検討してきた。これらから

①「いじけ」「くにせり」「さしくせ」「ゆるいみき」「もりあい」のような語の認定の相違によるもの。

②「きよ」「ひぎやかわさば」「こみや」「めよ」のような拗長音の表記による混乱であるもの。

③「はけわちへ」「もちなし」「はさめ」「おれ」「たますたり」「きもたり」のように活用の種類の相違によるもの。

④「うらやめ」のように活用形の認定の相違によるもの。

⑤「くわけ」「くせ」「あけずみそ」のように古くからエ段音であったと推定されるもの。

⑥「きんかなりよもひ」のように特殊な音環境にあるもの。

さらには

⑦「せせ」「たまめつらせ」「しらす」「たうり」「なおれよる」のように疑問のあるもの。

を除いたものは、すなわち、真に母音の変化によるエ段音とイ段音の混同例となるものは

⑧「てるきしやき」「いしゑけり」「かに」「ちりさび」「まかび」「おかめ」と、ア行音、ハ行音、ワ行音のもの。

である。

以上のことから、（たとえ、⑦の疑問のあるものを含めたとしても）①『おもろ』のエ段の仮名とイ段の仮名は「へ」「ゑ」「い」を除いて、ほぼ規則的に使われていて、発音を忠実に写しているといえる。また、そのことから、②『おもろ』時代は、ア行、ハ行（特に語中）、ワ行を除いては、エ段の母韻とイ段の母韻との間にほぼ

区別があったといえる。（区別を失いかけていたとしても、最も初期の段階である。）（三三頁）

イ段とエ段の行き来が、ア・ハ・ワ行音に集中して見えるとする点は注目すべきである。

エがイに転じた例が京畿の室町時代のことばに顕著であることは既に見てきたところで、『おもろさうし』のそれがこれに共通するものであることは明らかである。高橋氏はア・ハ・ワ行音には三母音化が起きていたとされているようであるが、エとイとの区別はあり、個別的にエ↓イの変化が起きていたものと考えるべきであろう。その例は、室町時代の京畿の資料に比べていくらか多いけれども、本質的には両者同じ性格のものと見てよいのではないかと思われる。逆にイが期待されるところにエが現われる例、

もりやへこた（群れ合い子達、一の三五）おしやへ（押し合い、八の一三）あへちへきみ（相手君、一二の六九）わかゑきよう（若い人、一三の五五）かゑなて（掻い撫で、一三の一七一）……

などもあるが、京畿の室町時代語資料にもイをエにしてしまった例はあるところであって、類推仮名遣いによるものではなく、e↓iの変化の大きな動きの中で、その逆の動き（誤れる回帰）を生じて、生まれたものと解される。

巻一についてみると、e↔iにかかわるかと見られる例は、

そろいて（九、揃）ゑそこ（一七）おれ～（一、二、六、九、一六、一八、二四、三二、三四、三七、三九、四一、降、尊敬の意の下二段活用か）いせゑけり・いしゑけり（三一、三三、三四）さうぜ（三四、三六、想）ぜるまま（四〇）もちなちやる（四一、持）

くらいであって、他は、エ段の仮名が期待されるところはエ段の仮名で、イ段の仮名が期待されるところはイ段の仮名で書かれているのである。

なお、筆者の先の推定からすれば、セ・ゼにもシ・ジに転じた例が多くあってもよいことになるが、『おもろさうし』にその例が認められるのかどうかはいまだ明らかでない。高橋氏は、サ・ザ行の例として、

語中の例　①たまめつらせ、②せせ、③さしくせ、④くせ、⑤いせゑけり・いしゑけり、⑥くにせり・くにしり

語頭の例　⑦せらす・しらす、②せせ

の例を検討され、③④⑥を該当例でないとされ、①②⑦を疑問のあるものとされ、⑤をセ↔シの例として残された。疑問の例を含めても、セ↔シの変化の起きているケースに前接母音がaである例が少なく、先に-aʃe に最も-aʃi への変化が起きやすかったとしたところに一致しない。エ↔イの例として高橋氏があげられた例の方は前接母音が殆どaかo（一例eあり）かであって、中でもaである例が圧倒的に多い。

ここで、エ段音の口蓋音化に目をやると、『おもろさうし』においては、周知の如く「ちへ」「ちゑ」の口蓋音表記を見る。表記上に口蓋化音が顕著に現われるのはテ・デであるが、高橋俊三氏は散発的にはケ・ゼ・レにも現われることを指摘されている。[注62] また、高橋氏が「本土の一音に対応する音を二つの仮名で表記したもの」とされた例のうち、「エ列音に対応するもの」、[注63]

①ともはい（一三の九五六、艫舳）
②ほい（一二の六九八、舳）
③とまへて・とまいて（三の九八、四の二一一、尋めて）
④ささまへ（四の一七四、差さめ）せらまへ（一五の一〇五六、為らめ）
⑤ききゑは（一三の九五五、聞けば）
⑥さかい（一七の一一八〇、酒）
⑦おそい（一六の一一七〇）

⑧はりゑ（一三・八七二、晴）
⑨ゑれい（一四・九九八、選れ）
⑩みぢよいもい（一〇の五四一）

の多くもやはり口蓋音を表わそうとしたものと見てよいのではないか。高橋氏も、⑤⑩については口蓋音をうつしたとも考えられるとしておられる。口蓋化とともに破擦音化した行が耳だつために「ちへ」「ちゑ」をよく表記したもので、それ以外の行の口蓋化表記が少ないけれども実際にはそれ以外の行のェ段音もkie·mieなどと口蓋化していたと見るべきであろう。この状態は、先に見た室町時代京畿のそれと一致していると言ってよいと思われる。沖縄方言の三母音化傾向は、この状態、即ち、室町時代の京畿のことばの状態から、先に推定したようにして、生じたものと解することができるのではないかと考えられる。

『おもろさうし』におけるェ段音以外の音の口蓋化について、高橋氏は次のことを明らかにされている。(注64)

○広い母音のア列・オ列音の口蓋化が有力である。また、発生もア列・オ列音の方がイ列・ウ列より早かったと考えられる。

○『おもろ』では、子音の前のi母音の影響による口蓋化は見られるが、子音の後のi母音の影響による口蓋化（伊波のいわゆる口蓋化に近い）はほとんど見られない。ただし、kja·kju·kjoがjの影響によってtʃa·tʃu·(tʃo)に口蓋化した例はある。

事実を確かにふまえたすぐれた考察であるが、ェ段音とイ段音の口蓋化についての解釈については別の考え方ができるのではないかと筆者は考える。ェ段音の口蓋化が表記以上に起きていたのではないかということについては既に述べた。更に、ア段・オ段などとの比較の上で言えば、例えば、kaの口蓋化音kiaがよく表記上に現われるのに対して、keの口蓋化音kieが表記上に極めて稀にして現われていないのは、kaとkiaの違いに比べて、keとkieの違いがさほど大きなちがいと意識されなかったことによるのではないかと見られる。イ段音について、高橋氏は、kiがtʃiになった例が特定の条件下でしか起きていないことから、イ段音の口蓋化がほとんど起きていないとされたが、ki>tʃiの口蓋化は一般的に起きていないけれども、ki>kiのような口蓋化は起きていたと見てよいのではないか。『海東諸国記』付載の『語音翻訳』で、チ・ツがtʃi·tsuの音でとらえられているところから見て、そう見てよいのではないかと考える。イ段音の口蓋化音は表記する方法がなく、表記上に現われていないものと解される。

以上、筆者の解釈では、沖縄方言における口蓋化音は、はじめェ段音に起き、これが三母音化傾向を起こす原因となり、同時に他の段の子音の口蓋化をひきおこしたということになる。筆者の解釈では、二つの事象を統一的に説明することができるのである。

伊波氏は、三母音化傾向による混乱を避けるために、イ段・ウ段に口蓋化が起き、これがェ段・オ段・ア段にひろがったとされ、高橋氏はア段・オ段と広い母音の段から口蓋化がはじまったとされた。伊波氏の立場に立つと、三母音化傾向生起の原因を別のところに求めなくてはならないことになる。高橋氏の、口蓋化の原因を「子音の前のi母音の影響」にあるとする解釈は、事実をふまえたものではあるけれども、それだけが原因ならば、口蓋化がもっと早い時期に起きてもよかったし、逆にもっとおそく起きていてもよかったことになる。更に、本土方言の多くの方言ではなぜ口蓋化が盛んではないのかが説明しにくいように思われる。

3. オとウ

『おもろさうし』のウ段とオ段の音についても高橋俊三氏に高論があり、次の推定をしておられる。(注65)

オ段の仮名とウ段の仮名は、タ行・サ行を除いて、混用例がある。すなわちoとuとは音韻的には同音になっているのであろう。（中略）代表的例をあげると次の通りである。

ア行 ①おきおほち―うきおほち（祖父）
②うゑて―おゑて（植えて）
カ行 ③ここら―こくら（多くの）
④みしやく―みしやこ（御杓）
カ行拗音 ⑤なさいきよ―なさいきゆ（父人）
（「きゆ」の表記は右の一例のみ）
サ行拗音 ⑥みしよ―みしゆ（御衣）
⑦とよたしゆ―とよたしよ（とよみたる人）
ナ行 ⑧のばまし―ぬばまし（延ばまし）
⑨ぬし―のし（主）
ハ行 ⑩きみほこり―きみふくり（君誇り）
⑪あふらちへ―あおらちへ（煽らして）
マ行 ⑫きも―きむ（肝）
⑬むすめ―もすめ（娘）
ヤ行 ⑭よかる―ゆかる（良かる）
⑮（あさ）つゆ―つよ（露）
ラ行 ⑯そろて―そるて（揃って）
⑰みまふる―みまふろ（見守る）

オ段とウ段の場合については、高橋氏は、推定の形ではあるけれども、同一音に帰していたとされている。

しかしながら、ここに例示された例に限って見ても、「ぬし―のし（主）」「あふらちへ―あおらちへ（煽らして）」「よかる―ゆかる（良かる）」の例は、o―uの点にだけ限って言えば、本土の室町時代の文献にも見えるところである。そして、言うまでもなく、『おもろさうし』においても、一般的には、オ段の仮名が期待されるところはオ段の仮名で書かれており、ウ段の仮名が期待されるところはウ段の仮名で書かれているのである。従って、オ段とウ段とが動揺する例が、室町時代の京畿の文献に見える例に比べると多いけれども、それと共通するものと把握すべきものなのではないかと筆者には思われる。『おもろさうし』巻一においてオ段とウ段との動揺する例、又はそれにかかわる可能性のある例をあげると次の通りである。

たうり（三九、田降）なふし（二四、直）あおて（二五、煽て・合て？）す（三、六、三一、三四、三五、三六、四〇、四一、係助詞）あすぶ（一、二、二〇、三二、三七、遊）しよ（三六、主、或いは長音か）しより（一、八、二七、三二、三三、四〇、首里）そさん（三八、荒）ゑりちよ（一六、cf.ゑりしゆ）まぶる（一、三、一六、一七、三三、三四、三八、四〇、守）あよ・あゆ（三一、三三、三四、三六、三七、三九、四〇、肝）こよわちへ・こゆわちへ（三八・乞）つよ（三九、露）しまゆ（二八、島世）よき（三九、雪）よきやて（六、行合）よらふさ・ゆらふさ（四一）あよで（四〇、歩）もちよろ・もちろ・もちよる（三七、三九、四〇）る（二一、係助詞）

オ段の仮名が期待されるところがオ段の仮名で書かれ、ウ段の仮名が期待されるところがウ段の仮名で書かれている例に比べると、決して多いとは言えないと思われる。

今、ここに、京畿の混同例として、出雲朝子氏が調査された『玉塵』に見える例を引くと次の通りである。[注66]（　）の付された語は、『玉塵』には見えないけれども、当時存したと見られる形である。

ウマ〳〵トーヲマ〳〵ト、イヅクー（イヅコ）、カシクーカシコ、

カタクマー（カタコマ）、スクヤカースコヤカ、ツモグリーツモゴリ、（ハグクム）ーハゴクム、カマビスシイーカマビソシイ、カズユルーカゾウ、（ナズラウ）ーナゾラウ、アヤツルーアヤトル、ハツコー（ハトコ）、マツウーマトウ、マツワルー（マトワル）アナヅルーアナドル、ヲヅロカスーヲドロカス、（マヅシイ）ーマドシイ、ヲギヌウーヲギノウ、（ヲヌシ）ーヲノシ、サヌミーサノミ、タヌキータノキ、ヌグーノグ、フスブルーフスボル、マブルーマボル、ムサブルームサボル、カウムリー（カウモリ）、ヒネムスーヒネモス、アユムーアヨム、コユミー（コヨミ）、ユワイーヨワイ、カルシムルー（カロシムル）、カルンズルー（カロンズル）

『玉塵』のボリュームからすれば、その例は決して多くないけれども、先に沖縄方言の時に見られた「（ヲヌシ）ーヲノシ」「マブルーマボル」の例が見えるのが注目される。長音の例となるため除いたが、出雲氏によると『玉塵』には「ユウーヨウ」（良）の例も見える。沖縄方言の例としてあげられている「よかるーゆかる」が思い合わされる。

もう一つ、武井睦雄氏によって、[67]『捷解新語』に見える例を引いておく。

うなし（同）おくいて（起）くつるぎ（寛）つむら（積）のくし（残）のぶり（上）

すこなう（少）ひろい（比類）ふこめ（含）みぐろし（見苦）やごら（櫓）

『捷解新語』のこれらの例は、九州方言のそれをとらえているものである可能性が考えられるが、オ段音とウ段音との動揺は、室町時代の本土のことばにおいても起きていたのであって、それを見た目からすると、『おもろさうし』のそれもこれに共通する現象と見てよいのではないかと思われる。即ち、オ段音とウ段音とはいまだ合一化していないものと見てよいのではないかと思われる。従って、この場合も、『おもろさうし』においてウ段音が期待されるところにオ段音が現われる例、「もこ」（婿）「よき」（雪）なども、規範意識による類推仮名遣いなのではなく、古い語形の方をとどめていたり、[68] -o>-u の動きの中で逆の動きを生じたものとしてとらえられるべきではないかと見られる。

(七)『語音翻訳』の母音

朝鮮世宗朝一四七一年に申叔舟が編した『海東諸国紀』に付載された『語音翻訳』は末尾の「弘治十四年四月二十二日」の年号から一五〇一年に記されたものと見られる、沖縄方言資料である。

この資料において、オ段音とウ段音、エ段音とイ段音とが、それぞれ区別されていることについては早く伊波普猷氏が指摘されたところである。[69]

「語音翻訳」を通読して、まづ気のつくことは、イとウがそれ〴〵殆どー（i）とㅜ（u）で写されてゐることだ。例へば、肉 시시（shishi）、路미지（michi）、昼피루（firu）、冬후유（fuyu）等の如きである。之に反してオはㅗ（o）としたものもあれば、우（u）としたのもあり、エもㅐ（æ）ㅔ（ɔi又はe）、ㅔ（ɔ̃i又はy）、ㅓ（ǎi）、ㅟ（üi）としたのもあれば、ー（i）としたのもある。例へば、大路오부미지（opumichi）、小路구미지（kûmichi）、去年구조（kudjo 即ちkudzo）、鶏투리（t'uri）、今年구두시（kutushi）、這裏고마（koma 同時代の石碑には、くま）、晴了파리더［데］（farite）、或は파［피］리［린］디［데］（fariti）、姉아리［린］（anai）眼뫼［뮈］（moi）、酒사귀（saküi）、飲누미（numi）、手티（t'i）の如きものである。以上の例を見ただけでも、当時oはuに遷る途中にあつた為に、時としてはoに聞え、時としてはuにも聞え、又eもiに移る途中にあつた為に、時としてはeに聞え、時としてはiに

も聞えたので、まち〳〵な記号が使はれたと思はれる。（だから釈義の所で諺文の音訳をローマナイズする時には、便宜上oとuとの間の音にはUを用ゐ、eとiとの間の音にはIを用ゐることにする。）かうしてエ列がイ列と又オ列がウ列と、全くは一致せず、其の間に幾分の開きがあつた為に、加行の子音の如きは、口蓋化してゐない。

1．エ段音とイ段音

また、服部四郎博士は、キとケと（ギとゲとも）が、ḳiとkʲi(giとgʲi)で対立していたとされた。[注70] また、胤森弘氏は、他の行についても、エ段音とイ段音とを調査して、次の結果を示され、[注71] その対立を-i対-iとされた。

（表）『翻訳』における母音ㅣ(ij)とㅡ(i)の頻度表（胤森）

子音 / 母音	ㄱ k	ㄴ n	ㄷ t	ㄹ r	ㅁ m	ㅂ p	ㅅ s	ㅈ č	ㅊ čʰ	ㅋ kʰ	ㅌ tʰ	ㅍ pʰ	▷ z	○ zero
ㅣ ij	긔 13			릐 3	믜 4	삐 4		찌 1				피 1		
ㅡ i	기 11	니 1	디 7	리 21	미 16	비 4	시 27	지 12			키 1	티 2	띠 11	이 13

エ段音とイ段音との音価をどのようなものと見るかはそれぞれに異なるが、両者が音韻として区別されていたということは一致している。筆者も、『語音翻訳』の時代には音韻としてエ段音とイ段音とが区別されていたと考える。そう考えて、先に見た『おもろさうし』の結果と符合する。

ところで、そのエ段音とイ段音と（特に前者）がどのような音で実現していたのかについては、『語音翻訳』においてそれらの音がどのように表記されているのかを見なくてはならない。イ段音が-iの音であったらしいことはあまり問題がないと思われるが、[注72] 問題のあるエ段音について、伊波氏は先のようにその例を任意に列挙するにとどまり、他の二氏はいくつかの音のうちの一つの音のみを取り上げるにとどまっているからである。次に行ごとにエ段音を取り上げてみる。『語音翻訳』の底本には東条操編『南島方言資料』（刀江書院　一九三〇・七）に影印されている内閣文庫蔵本によった。[注73] 所在はその頁・行によって示した。諺文による音注は、河野六郎博士[注74]に従ってローマ字に転写した。誤字と見られる場合は〈　〉内に正しいと見られる語形を示した。（表2）

本文をどう解釈するかによって、表に若干の異同を生じるけれども、全体として見れば、エ段音に、口蓋音-yə·-yəiと、-iに近い音と見られる-üi·-ui との二種の音が存していたことが知られる。この事実は、先に三母音化傾向生起の原因について考えたところによく符合する。エ段音が口蓋化を起こしてḳie·nie·mieなどになっていたために、それらが-iに転じやすく、-akie·-arieなどの例を中心に-akü·-arü にゆれる語が生じていたものと解される。これらは、後の三母音化傾向をひきおこすもとになった変化であるが、エ段音が明確な口蓋音-ieの形で存していたことを見のがしてはならない。

2．オ段音とウ段音

『語音翻訳』におけるオ段音の現われ方については胤森弘氏の調査がある。[注81] 氏は、『語音翻訳』について、

oのままであるもの

o＞uとおもわれるもの

の各用例を集め、その異なり語数を数えて、前者が三四例、後者が一九例であることを示された。あわせて、u＞oと見られる例（三例）にも

（表2）『語音翻訳』のエ段音

	口蓋音（-yə·-yəi）	-ɯi·-ui	-i	その他
エ	yəi（ヱケラク、3・4）			
ケ	kyəi（ヱケラク、3・4）	kɯi（サケ、酒、3・1ほかに9例）[注76]		
ゲ		kɯi（アゲ、上げ、3・2ほかに1例）[注77]		
セ	syəi（ノマセ、飲、3・5）			
ゼ		ncɯi（カゼ、風、4・6）		
テ	tyəi（フテツ、一、3・2） t'yə（テン、天、4・1ほかに5例）[注78]		ti（テ、助詞、4・4） ti（ツトメテ、清早、4・6） ti（アサツテ、後日、5・1） t'i（テ、手、7・9）	
デ			nti（フデ、筆、6・8）	
チェ	c'yə（オワチエ、3・2）			
ネ	nyə（ネン、年、5・2）			rai〈nai〉（アネ、姐姐、2・1）[注80]
ヘ		pui（ル、蒜、6・5）		
ベ		pui（ハベラ、侍ら、3・1） mpui（ベ、辺、晩夕、4・7） pui（ナベ、鍋、7・4）		
メ	myəi（コメ、米、5・9） myə（ヤスメ、休、4・5）	mui（アメ、雨、4・2ほかに1例）[注78] mui（ツトメテ、清早、4・6） mui（コメ、米、5・10） mui（メ、眼、7・8）	mi（ヌクメ、向火、4・9）	

レ	ryai（スレ、5・8）	ruui（アレ、3・4） ruui（クレ、這、3・9） ruui（未詳、皿、7・3）	ri（ハレ、晴、4・2ほかに2例）[注79]	

注意されている。氏が集められた例には若干の遺漏も認められるが、その大概はうかがうことができる。[注82] 室町時代の京畿の資料に認められる例に比べると、オ段音が期待されるところにウ段音が現われる例が圧倒的に多いのであるが、音韻としては、オ段音とウ段音とが区別されており、語によって動揺するものがあったものと見られる。そのように解釈しなければ、オ段音がオ段音でとらえられている例が説明できない。

(八)三母音化傾向

以上のように、『語音翻訳』や『おもろさうし』によれば、エ段音の口蓋化と、それにともなうエ段音のイ段音化と、オ段音とウ段音との動揺とは起きていたが、母音は五母音であり、三母音化傾向は実現していなかった。高橋俊三氏によると、少なくとも一八世紀には三母音化傾向が実現していたようであるから、[注83] 一七世紀にそれは実現したものかと見られる。

(九)上代特殊仮名遣エ段の甲乙

以上のように、中世日本語ならびに現代方言について考察する時には、エ段音の口蓋音は成立の新しいものと考えられるように思われるのである。そう考えることによってさまざまな事象が統合的に説明できるように筆者には思われるのである。

しかしながら、そのような解釈をする以上は、上代特殊仮名遣のエ段（とイ段）の甲・乙二種の音を子音の口蓋音対非口蓋音、例えばkje対ke（kji対ki）などととらえる説に[注84]対する筆者の立場を明らかにしなくてはならない。上代におけるエ段の甲類の音が口蓋音、例えばkjeなどであったとすると、それが一旦ほろび、中世になって再び生まれてきたと考えるのは不自然であるからである。筆者の立場に立つ時は、上代語のエ段の甲乙は子音の口蓋音対非口蓋音という対立ではなかったと考えなくてはならないことになる。筆者としては、上代日本語の母音体系についての研究が、従来、上代語そのものの研究や、漢字音の研究からのみなされて来たのに対して、エ段音のその後の姿、即ち中世におけるその姿について考察することによって、それについて発言することとなったのが本稿であると考えるものである。即ち、本稿の考察が妥当であるとするならば、上代語のエ段の甲乙二音は子音の口蓋音対非口蓋音という対立ではなかったと見た方がよいと考えるものである。

従って、この問題についての筆者の考察はここまででひかえることも考えられるわけである。しかし、やはり、少なくとも、上代語のエ段の甲乙を子音の口蓋音対非口蓋音の対立であると必ずしも見なくてよいことを確認しておくことが望ましいし、更には、上代日本語の母音体系についての筆者の立場を明らかにしておくことが望ましいであろう。

上代語のエ段音（とイ段音）の甲乙を子音の口蓋音対非口蓋音の対立と見る説の積極的根拠は二つあげられているように思われる。一つは、エ段とイ段の甲乙の別が、ケ・ゲ・ヘ・ベ・メ、キ・ギ・ヒ・ビ・ミの音節に限られているという事実である。そして、もう一つは、それとも関連するのであるが、甲乙の音を表わすのに用いられた漢字の字音から

する推定である。

前者については、しかし、大野晋博士が次のように述べられている。[注85]

キヒミギビが二つの対立する音節である場合、蓋然性としては前舌母音をもつキヒミギビと、中舌母音をもつキヒミギビとの対立というように想定できると私は考えてきた。

この点に関して当日私は右の趣を服部先生に伺ってみたのであるがそのお答えは、「キヒミギビの甲乙が前舌母音と中舌母音の対立の場合もありえないことはない」とのことであった。「ただしkiとkïのような音では後に融合しにくいと思う」というのが服部先生の御意見であった。

およそ或る事態について推定を下すときには、関係する資料をできるだけ広く考慮に加え、それらすべてが包括的に、かつ統一的に理解できるような推定を下すべきものであると私は思う。

キヒミギビの甲乙音の推定にあたって、もしそれが口蓋化、非口蓋化の対立であるとする以外の解釈が不可能ならば、私はそれに従う以外にない。しかしこれを前舌、中舌の母音の対立とする解釈が可能であるならば、また実際に方言の中にそういう状態の例があるのならば、かつまた八十七音節の存在を立証する資料となった約一千字に及ぶ万葉仮名の中国字音の研究においてオ列乙、イ列乙、エ列乙に共通な中舌音の要素があり、イ列甲、エ列甲には中舌の要素はなく、イ列甲エ列甲は前舌母音であるという共通性があるのならば、この事実を生かした解釈を下すべきであると私は考えて来た。筆者も、やはり、キ・ギ・ヒ・ビ・ミの音節に存した音韻的対立を、この音節に限られるということからただちに子音の口蓋音対非口蓋音の対立と見なすことはできないのではないかと考える。更に、この説では、セ・ゼ・テ・デ・ネ・レ、イ・シ・ジ・チ・ヂ・ニ・リにおいては、子音の口蓋音対非口蓋音の対立が保持されにくかったと考えることになるが、必ずしもそのようにばかりは考えにくいのではないかと思われる。二音の対立が子音の口蓋音と非口蓋音の対立であったとするならば、これらの音節においても区別が保持された音節があってもよいのではないかと思われる。また、この説では、テ・チの場合、子音の口蓋音と非口蓋音の対立が保持されるためには、口蓋音tje·tji が破擦音化する可能性が大きいとするが、もし、そうであるとするならば、テ・チの甲類の音は、甲乙の対立を保持するために破擦音化していてよかったのではないか。他の行の場合から見て、ti+a-からテ甲（持テリ・立テリ……）が、ta+i からテ乙が、tö+i 又は tu+i からチ乙（轡（クツワ）－口（クチ））が生まれていたと考えられるから、この甲乙の別を保持するために、テ・チ甲の破擦音化が起きていてよかったのではないかと見られる。チの破擦音化が一六世紀になって起き、テの破擦音化が沖縄方言に起きているところから見て、その原因があれば、上代にも破擦音化が起きていてもよかったものと考えられる。一六世紀におけるチ、沖縄方言におけるテの破擦音化の原因については既に見たところである。上代にテ・チが破擦音化していないということは、逆に、上代のテ・チ甲が口蓋音でなかったということを語っているとも考えられるように思われる。

次に、もう一つの根拠、即ち、甲乙二種の音を表わすのに用いられた漢字の字音からそれを子音の口蓋音と非口蓋音との対立と見る点について考える。この説は、この点についてあまりくわしくは論じていないが、筆者のことばで整理すると、次のようにとらえられるのではないかと思われる。

①イ段の甲類と乙類の音は、一般に前者が重紐甲類（A類）の漢字、後者が重紐乙類（B類）の漢字で表記されている。[注86]

②重紐甲類（A類）と重紐乙類（B類）との違いは、介音における口

蓋音ï対非口蓋音ïの対立とする説[注87]が定着しているが、子音の口蓋音と非口蓋音との対立であったのではないかと考えられる。[注88]

右においては、要点を便宜①と②に分けたのであるが、この説は、重紐甲類（A類）と乙類（B類）の対立が、上代特殊仮名遣の甲乙の場合と同じく、舌音において欠けている点を指摘していて注目される。[注89]しかし、この点については、介音における口蓋音i対非口蓋音ïの対立と見ても説明できるのではないかと思われる。[注90]

②の、重紐甲乙（AB）両類の音価については諸説があり、介音における口蓋的なiと非口蓋音なïと見る説が定着しているが、決着を見ているわけではなく、なお今後の研究に待たなくてはならない。ただ、ここで注目しておかなくてはならないことは、重紐甲乙の対立を介音における口蓋音iと非口蓋音ïの違いとする立場に立っても、介音における口蓋性の強弱が声母における口蓋性の強弱の差異を伴った可能性が考えられるという指摘があることである。[注91]上代日本語における甲乙二音の対立も、それが口蓋音iと非口蓋音ïとの対立であったとするならば、右と同様に子音の方にも口蓋音と非口蓋音の違いを伴っていた可能性が考えられるということになる。

しかしながら、それは、上代特殊仮名遣の甲乙の対立が、重紐甲乙（AB）の違いに対応しているという事実（①）が認められての上のことである。その点については、森博達氏によって、イ段音甲乙の場合も、ェ段音甲乙の場合も、重紐甲乙（AB）と対応していないという指摘がなされている。[注92]即ち、イ段音について見ると、従来の説が、イ段音の甲乙が重紐甲乙（AB）に対応しているとしてきたのに対して、森氏は、平山久雄氏の之韻の音価についての研究成果[注93]によって、キ・ギ甲乙の別が、重紐甲乙（AB）によってではなく、主母音の前舌・非前舌の違いによって表記し分けられているとされた。ただし、この点については、なお批判がないわけではないようである。服部四郎博士は、ヒ・ビの甲乙が重紐甲乙（AB）と対応していることと、之韻の主母音が「前寄り」であった可能性もあるとして、自説を保持されている。[注95]また、林史典氏は、森氏が、イ段甲乙の違いが子音の口蓋化しているかいないかの違いであったとするならば、キ・ギにおいても重紐甲乙（AB）の漢字で表記し分けたはずであるとしている、そのような考え方について、「原音のsystemにorientateされすぎた見方であるかも知れない」とされている。[注96]イ段音の甲乙の音価についてはなお検討されなくてはならないようである。

しかしながら、ェ段音の甲乙の別については、従来も重紐甲乙（AB）との対応関係が指摘されていたわけではなく、森博達氏が指摘されているように、両者の間に対応関係は認められない。森氏は、直音四等韻（四等専属韻）が唐代北方音で拗音化していたという事実を背景に、『日本書記』α群の表記者においては、ェ段甲を表わす斉開四等字も口蓋介音をもっていたと推定し、祭韻重紐甲類（A類）字とあわせて、ェ段甲を表わす漢字の字音が口蓋介音をもつ音であったのではないかとされる。甲の音を表わすのに口蓋介音の有無は問題ではなかったのではないかということも考えられるが、右の解釈に立っても、森氏が指摘されるように、中国語にe・ɛ・ɛi の音価をもつ韻類が欠けていたか、欠けていたことになるわけであるし、口蓋介音をもつ甲に対応する乙の方は非口蓋介音をもつわけではないから、ェ段甲の子音が口蓋音であったとは必ずしも言えない。

仮りにイ段甲の子音が母音iによって口蓋性を帯びていたとしても、ェ段の甲の音の方は子音が口蓋化していたとはただちには言えないように思われるのである。なお、倭音説に立つ有坂秀世博士もェ段甲の音を直音eと推定されている。[注97]

以上のように考えると、ェ段・イ段の甲乙二音の対立が母音の違いであった蓋然性はやはり考えられるのではないかと筆者は思う。[注98] そして、母音の対立と見る場合は、その二音がキギヒビミ、ケゲヘベメの音節にのみ存することと、それを表記するに用いられた漢字の字音とから、甲乙の対立を前舌と非前舌の対立と見た方がよいのではないかと思われる。従って、筆者は次のような説に従いたい。[注99]

	甲	乙	甲	乙
有坂説	i	ïi	e	ə̯又はəi
服部旧説	i	ïi	e	əi
大野説	i	ï	e	ë
			(o, ö)	(o, ö)

これらの説のうちどの説がより蓋然性が高いのかについては明らかでない。音によっては音価に推移があったことも考え得る。[注100] 上代をシラビーム言語前期と見る筆者の立場からすれば、二重母音は二文字で表記されたと考えられるから、ïï·əi·əe であったならば、それらが二文字で表記されたはずと考えることもできる。しかし、ï・ə が副母音としてしか現われないために二重母音が一文字で表記された可能性も考えられる。森博達氏の説[注102]

i, ï, e, əi, (o, ə)

を右に加えなかったのは、氏がオ段乙の音を ə と見ておられるからであって、この場合の əi は、筆者の立場では、オ段乙の仮名とイの仮名とで表記されたのではないかと考えられるからである。また、後世ェ段の甲乙が一音に帰するところから見ても、オ乙 ə で、ェ乙が əi のような音であったと考えない方がよいように思われる。筆者は、現段階では、有坂説・服部旧説の可能性を包含した形で、大野説に従い、上代の母音を、

a, o, ö, e, ë, u, i, ï

と表記することにする。その意味では、o_1・o_2・e_1・e_2・i_1・i_2 と表記してもよく、その方が誤解を招くことが少ないとも言えるが、この表記は、ェ段・イ段の甲乙の対立を子音の口蓋音対非口蓋音と見る説で用いられたために、その意味に誤解される恐れがあるので避けた。特に、この説においては、Ki_1 などの表記が $(ki)_1$ 又は k_1i の意味で用いられているようで、まぎらわしい点があるように思われるので、これを避けた。

ところで、このような八母音説をとる場合、狭母音（i・ï・u）の数と広母音（a）の数とに対して、開きの中位の母音（e・ë・ö・o）の数が多すぎるという問題点がある。[注103] この点については、世界の言語の中にはそのような例も皆無ではない。[注104] ところからすれば、四母音から五母音への過渡的な存在として存し得たと考えられないものかと思う。

三、P音

(一)先学の説

沖縄方言の或る方言のハ行音が p 音であって、それが日本語の古い姿をとどめているものであるということを早く指摘したのは伊波普猷氏である。[注105] 氏は、そのいくつかの論文で、沖縄方言に p・Φ・h が分布していることについて、例えば、次のように述べておられる。

○実に琉球に於ては推古朝以前の音韻変化と足利時代の音韻変化が一度に見られるやうになつてゐる。（「琉球人の祖先に就いて」二六頁）

○pからFへそしてFからHへと国語が二三千〔年〕間に進んだものが、現在南島に縮写されてゐる（「琉球語の母音組織と口蓋化の法則」三三頁）

このような見方は、一般に今日に殆どそのまま引き継がれているところである。

○いうなれば、日本本土において、文献時代以前の古代語から現代諸方言に至るまでの十余世紀の間、営々として変化してきたハ行音の相が、実に現代琉球方言の中に縮図的に写し出されているわけである。（中本正智『琉球方言音韻の研究』一七六頁）

○これらの分布は、ハ行子音が、歴史的に、p→F→hと移り変わっていった変遷の姿をうかがわせてくれる貴重な資料である。（外間守善「沖縄の言語とその歴史」（『岩波講座日本語11方言』一九七七・一一）

しかし、このような解釈に対して、筆者は素朴な疑問を感じる。本土方言において一〇余世紀にわたって起きたとされているp∨Φ∨hの変化、それが沖縄方言という一小方言に保存されているというのは不自然なのではないかということである。もっとも、伊波氏の場合に限って言えば、氏は、沖縄方言におけるpからΦ・hへの変化を本土方言の影響によるものと解釈されているから、本土方言における一〇余世紀にわたる変化が沖縄方言においてそのまま起きたものとはしておられないことになる。氏は、沖縄方言のすべてがp音であったところへ、室町時代以降本土方言の影響を受けた首里や奄美大島ではΦ・hへの変化が起きたと考えておられるのである。しかし、筆者は、京畿の方言において起きた音韻変化が次第に地方にひろがっていくということはあっても、その変化は、すべての日本語に起こるべくして起きたものであったのではないかと考える。何か新しい単語を借用するような形で、他方言の影響によって音韻変化が起きることは少ないと見るべきではないかと考える。そう考えてよいならば、本土方言においては、その限られた一部に一六世紀まで存したΦのみしか残存していないのに対して、沖縄方言にp・Φ・hのすべてが存しており、そのpが本土方言の文献時代以前のそれの残存であると見るのは無理なのではないかと筆者には思われる。伊波氏は、「p音考」の筆者上田万年博士の弟子の一人であって[注107]、その学問の継承進展からすれば、氏が沖縄方言のpを日本語の古い姿をとどめたものと解するのは宿命づけられていたことであったのではないかと思われる。筆者は、視点をかえなくてはならないのではないかと考える。

伊波氏以後、沖縄方言のp音についての研究は二つの方向に進められたと言ってよいであろう。一つの方向は、古いp音（それを文献時代以前のものと見る立場と、それより後のものと見る立場とがある）が沖縄方言に残存しているとした上で、なぜ沖縄方言においてp音が残存したのかということを考えようとした研究である。服部四郎博士の研究と中本正智氏の研究がそれである。そして、もう一つの方向は、はじめにも引いた亀井孝氏の研究と服部四郎博士の研究で、本土方言にp音が存した時代を引き下げようとする考え方である。

服部博士は、奄美群島のカ行音とハ行音とを観察して、次のように述べられた[注108]。

/k/が/h/に変化した方言で、「ハ行」子音が[p']・[p̄]・[Φ]・[hw]として保たれる傾向が著しい。大島本島では佐仁方言だけがこの特徴を有するが、そのすぐ隣部落では[k']が保たれていると同時に「ハ行」子音が/h/に変っている。奄美群島・沖縄群島の諸方言では、*kが/h/に変化した場合に、*pが更に/h/に変化することがくいとめられた蓋然性が大きい。（仲宗根政善氏は沖縄方言におけるこの相関関係に気づいておられた。）

宮古・石垣では、**kpが共に保たれているが、これらの方言では、東京・京都や大島・沖縄の諸方言のwにbが対応するのが注目される。これらの方言では*pが自律的に保たれたのであろう。

博士は、宮古・石垣ではpが自律的に保たれたが、奄美群島・沖縄群島の諸方言では、カ行音がhに変化していたために、pが、hに変化する

ことがくいとめられ、保存されたとされている。[注109] カ行音とハ行音とを相関的にとらえる考え方は注目されるが、この解釈には疑問が生じる。即ち、カ行音がΦの位置を占めていたから、ハ行音がΦに変化することがくいとめられ、pでとどまったというのならば理解できるけれども、カ行音はhの位置を占めていたのであるから、ハ行音は、本土方言と同じくpからΦに変わり得たはずで、これがpでとどまっている理由にはなり得ないと思われるということである。この解釈に立てば、沖縄方言のハ行音は、カ行音がhの位置を占めていたために、Φでとどまっていなくてはならないことになるはずである。

同じく沖縄方言にp音が保存されている理由について考察された中本正智氏は次のように説明された。[注110]

A、高母音化によって音素分割をもたらしたハ行子音の構造p?／p（奄美・沖縄）またはpʲ・f／p（宮古・八重山）は、それぞれ統合をさける方向へはたらくのであって、単純にp音のh音化という同一音素へ流れこむ変化は起こりにくい。

B、ハ行子音のp?／pの構造で、新しく発生した無気喉頭化音のp?は、無気音としての性質上、気音を要する摩擦音のFまたはhへは直接には変化し得ない音声である。もし、p?がFまたはhへ変化するとすれば、無気喉頭化という特徴をすて去ってから、つまり、p?→pの過程をふんでから、F・hへ変化するのである。したがって、p?／pの構造そのものが摩擦音へ変化しにくい構造となって、p音を維持するはたらきをしていると認められる。

C、ハ行音とカ行子音との変化の流れの中で、いずれが先にh音化するかによって、p音をとどめる構造をつくりだしている。すなわち、ハ行のp?／pとカ行のk?／kは、それぞれが統合をさけようとして反発しあう力をもっているから、pもkも、同じていどにh音の方向へ流れこんでいこうとする力をもっている。そこで、pが先にh音化した場合には、kのh音化はさえぎられ、逆にkがh音化した場合には、p音のh音化はさえぎられるという構造的な関係をつくりだした。

奄美・沖縄では、こうしてkがh音化してp音をとどめている方言が多い。

D、ハ行子音のpʲ・f／pの構造の中に、新しく発生した唇歯摩擦音fがあるために、これと対立関係にあるp音が、fときわめて近似している両唇摩擦音Fの方向へ変化することをきわめて困難にしている。したがって、pʲ・f／pの構造そのものがp音を維持するはたらきをしていると認められる。与那国方言で、イ・ウ段の脱落現象によって、0（ゼロ）／pの構造になり、さらに0（ゼロ）／hになって、p音を失っている事実をみても、f（またはF）の存在がp音をとどめる結果になっていることが推察されよう。

E、音韻の内的変化とは別に、外的な要因によってp音を消失する現象があるから、地理的・文化的に辺地であればあるほど外的な影響を受けずにp音が保たれやすい。

「高母音化」とは、沖縄方言においてe・oが高母音i・uに転じたことであり、つまり、三母音化傾向のことである。中本氏は、三母音化傾向の実現による混乱を防ぐために子音にp?／p、又はpʲ・f／pの音韻的対立が生じたと解されるわけで、そのようにして生じた子音の対立がp音をとどめたと解釈しておられるのである。三母音化傾向と子音における対立の確立との関係についての筆者の考えは既に述べた通りで、p?・p、pʲ・f・pの音は三母音化傾向実現に先だって存していたもので、三母音化傾向の進行とともにそれが利用されたものと考えられる。しかし、既に存したものではあっても、それを三母音化傾向による混乱を防

ぐために利用したとすれば、中本氏の言われるように、沖縄方言においてその子音の対立は維持されなくてはならなかったものと考えられる。従って、筆者の、この説に対する疑問は、その点に関してあるのではなく、三母音化傾向が実現し、子音の上に音素分割が確立した時点まで、沖縄方言のハ行音はなぜp音であり得たのかということである。既に見たように、沖縄方言における三母音化傾向は、筆者の考えでは、中世後期の京畿の言語状態から生まれたものと考えられた。この筆者の解釈が当っているとするならば、この時点まで沖縄方言のハ行音がp音であり続けていなければ、中本氏の解釈は成立しない。通説に従えば、京畿においてはハ行音のp音は文献時代以前に存した形であったのであるから、沖縄方言においてはなぜ中世後期までp音が生き続けていたのかが説明されなくてはならないことになる。

三母音化傾向が長母音ɔ:ɛ:の確立によって起きたとする中本氏の立場に立っても、ɔ:の確立は、京畿のことばで言えば平安中期一〇世紀頃以後ということになると思われる。オ段長音ɔ:は別稿[注11]で論じたように一〇世紀までに成立しており、それ以後ウ音便の一般化によって定着したと見られるからである。中本氏の説では、長母音ɔ:ɛ:が確立した頃のハ行音がp音であったと見なくてはならないが、そのことは、通説に従う限り、京畿のことばについては想定し得ないところである。ɔ:が確立した頃のハ行音はΦであったと見られているのである。沖縄方言においてはそれがあり得たとすれば、ハ行のp音が沖縄方言では後まで生き続けていたためと考えなくてはならない。従って、このように考えても、三母音化傾向による音素分割をp音が保存された原因と考えるのはむずかしいのではないかと考えられる。

沖縄方言のp音について、伊波氏以降に進められたもう一つの研究方向は、亀井孝氏と服部博士とによるもので、本土方言においてp音が生きていた時代を引き下げようとするものである。もしそのことが認められるとするならば、沖縄方言という一小方言にp・Φ・hのすべてが分布しているという不自然さを解消することができるのである。また、中本氏の解釈も可能になるのである。

文献時代に入って以後の京畿のハ行音がΦであったとする通説に対して、後までp音も存していたとする説のうち、先ず、亀井孝氏はその論拠をどこに求められているのであろうか。[注12]氏に、擬声擬態語がp音を保存し続けていたことについて論じた卓論があることは人のよく知るところである。[注13]亀井氏が、一般の語のハ行音のp音がΦ音とともにおそくまで保存されていたのではないかとされる[注14]根拠は、筆者の立場から補足しながらこれを要約すれば、次の二条になるのではないかと思われる。

(1) Φ（両唇のf）は不安定な音であった。

(2) 沖縄方言のようにpしか使わない方言が現代に存する。

(2)については、同氏の「わたくしの琉球語への関心と疑問」（先掲四二六頁）を参勘した。

根拠の(2)は今それを問題にしているのであるから、これを除くと、両唇摩擦音Φが不安定な音であったという一点が残ることとなる。しかし、この一点だけをもってしては、いつまでp音が生き続けたかは決しがたいように思われる。Φは、不安定であったために、語中においていわゆるハ行転呼現象を起こして衰退したけれども、語頭においては生きのび得たとも考えられる。ハ行転呼現象が個別的には奈良時代から起こりはじめるわけも、ハ行音がΦになっていたと考えてむしろよく理解できるように思われる。なお、氏は、「アッパレ」などの強調表現のpがハ行音のpを保存させるについて力があったと推定されているけれども、この点については、筆者は、強調表現のp音を新しい成立のものと見ている。[注15]

この亀井孝氏と似た解釈を、それよりも早く出されているのは服部四郎博士である。今、「琉球方言と本土方言」（『沖縄学の黎明』一九七六・四）に述べられたところを[注116]要約すると、次の二条となる。

(1) Φは、不経済な音で、長持ちしない音である。

(2) 慈覚大師が梵音pの発音に「以本郷波字音呼之、……加唇音」と言っているのは、日本語の音が'pであったからではないか。

(1)については先に問題にしたところである。(2)は、従来、日本語のハ行音がΦであったために梵音pを説明するに「加唇音」とされたものと解釈されてきた『在唐記』の記事に新しい解釈を加えられたものである。即ち、当時の日本語のハ行音が有気音'pであったので、梵音の無気音pを表わすために「加唇音」とされたものと解されている。しかし、『在唐記』においては、このpaの発音に続いて、有気音phaの発音について記されており、「皆加唇音」はそこにもかかるものと解されている。[注117]梵音の有気音phaを発音するのにも、日本語の「波」に「加唇音」えなくてはならなかったとすれば、その「波」はΦと考えなくてはならないと思われる。

橋本博士以後利用されてきた『在唐記』などの諸資料が示すところからはハ行音をΦであったと見るのがやはり穏当のように思われる。そう考えてよいとするならば、一般語でのp残存の有力な証拠が出てこない限り、通説に従って考えを進めてみることも必要なのではないかと思われる。

(二)筆者の解釈

1. p音の残存と新生

通説に従って、京畿のことばにおいてハ行音がp音であった時代を文献時代以前であったと見た場合、我々は、沖縄方言という一小方言に、京畿のことばにおける一〇余世紀にわたる変化形p・Φ・hのすべてが分布しているという不自然さをどのように説明することができるのであろうか。そのことを考えるためには、京畿のことばにおけるp音をぬきにしては考えを進めることができない。京畿のことばにおいて、ハ行音がp∨Φ∨hとかわったとされるけれども、本土方言においても後世p音が存しないわけではない。この後世に存するp音を、文献時代以前からのp音が残存したものと見るか、新しく生まれたものと見るかについては説の分かれているところである。しかし、別稿[注118]で考えた如く、筆者の解釈によれば、すべてのp音が残存であるのでもなく、すべてのp音が新生のものでもないのであった。結論のみをここに引くと、p音の残存と新生とは次のように示すことができる。

p
- → p（擬声語 p入声音に後続する、m韻尾に後続する）
  p音の一部　p音の一部
- → Φ → p（促音便、強調の促音、p入声音に後続する、p音のうちの多くの語）
  m韻尾に後続する、n韻尾に後続する）
  p音のうちの多くの語　p音の語
- → Φ → h・ç・Φ（その他一般の語）

ハ行音のp音がΦに転じていった後も、擬声語と一部の漢語とにはp音が残存していた。しかし、前者は非言語音との境界にある語であり、後者は外国語音であるから、音声としては〔p〕が存在し続けても、それは音韻体系の外の存在であって、音韻としては〔Φ〕一つのみが存していた。ところが、促音便が一般化し、更に、それに促がされて強調の促音が一般化してくると、p音が多量に新生することとなった。こうして、p音が日本語音韻体系の中に復活することになったものと見られる。

筆者は、沖縄方言においては、中世に多量にp音が新生した際、この動きにひかれて、一般の語のハ行音もΦからpに転じることになったのではないかと考える。知られているように、沖縄方言においても、語中のハ行音は、本土方言と同じく一般にΦを経て、いわゆるハ行転呼現象

を起こしている。語中の場合と同じく、語頭のハ行音も、本土方言と同じくΦに転じていたと見た方が自然なのではないかと考える。

2．Φ＞hの動き

それでは、なぜ、沖縄方言においては、一般の語のΦまでがpに転じることになったのであろうか。それは、Φがhに転じていく動きが生まれた中で、それに転じることがはばまれたためではないかと考えられる。何が、Φがhへ転じるのをはばんだかと言えば、それは、沖縄方言の或る方言においてはカ行音がhの位置を占めていたということである。ハ行音とカ行音とのかかわりについては先に先学の説に触れたが、右のように考えてはじめてうまく説明がつくように思われる。

ハ行音とカ行音のことについては後に考えるとして、ここでは先ず、Φがhに転じていく動きについて考察しておきたい。Φがhに転じていく動きがなく、Φのまま安定しておれば、強調表現などにいくら多量にp音が新生しても、それだけで一般のΦのすべてがpに転じたとは考えられないからである。

中世末期にΦをhに転じさせた力はなんであったのか。不安定な音であるとされるΦが長い期間にわたって行われていながら、ほかならぬ中世末期になってhに転じていくについては、それなりの原因があったものと考えられる。

その点については、従来もいくつかの解釈が試みられている。一つには、濁音/b/に対する清音に/Φ/のほかに/p/が確立したことが、Φをhに転じさせる力となったとする解釈がある。[注19] 確かにそのことも何らかの力となったものかと考えられるが、pは、b－Φの体系のすきまに入り込んだ音であって、いわば「Φの衛星」[注20]なのであるから、それがΦをhに転じさせた直接の力になったとは考えられない。そして、その通り、pが一般化してからも、ハ行音はΦであり続けていたのである。もう一つ、感動詞a:にはりを加えた形としてha:が早く確立していたことが指摘されている。[注21] これも、h音の確立に何らかの形でかかわったであろうが、しかし、これは非言語音との境界にある感動詞の例であるから、これもΦをhに転じさせた直接の力となったとは考えにくい。[注22] 更に、感動詞a:の存在は相当古いはずであるから、これをもって中世末に現われるh音を説明するのはむずかしいように思われる。Φがhに転じた原因を説明するもう一つの解釈として、ワ行の/wi//we/が/'i//'e/となったのにひかれたとする考えがある。[注23] しかし、イ段とエ段のワ行音が音節副音を脱落させた時期と、Φがnに転じた時期とは遥かに離れており、両変化の間に因果関係があったとは考えにくいように思われる。

このように考えて来ると、中世末期にΦをhに転じさせた直接的な力は、エ段音の口蓋化だったのではないかと筆者は考える。そう考えて、Φがほかならぬこの期にhに転じていったわけがよく理解できるように思われる。既に見たように、エ段音にはじまった口蓋化は、イ段音にひろがり、沖縄方言においては更に他の段にもひろがったと見られた。ヘ・ヒが口蓋化を起こすと、その子音はΦでとどまっていることがむずかしく、he·çiに転じていったのではないか。そして、その動きはア段・オ段にもひろがり、ha·hoとなったのではないか。ただ、ウ段だけはその母音が唇の音であったためにΦでとどまったものと考えられる。

後続する母音のちがいによって、Φ＞hの変化に遅速のあったことが、文献資料の例から言われているが、それによると、次の順にh化が進んだのではないかとされている。

〔Φ〕が失われて行く場合母音によって遅速のあったらしいことは、明代の中国人及び朝鮮人の手に成った資料から略々観取される。これによれば、まず母音〔i〕〔e〕にむすびつくもの（「ひ」「へ」が、中世末期頃既に〔h〕の形をとり、ついで〔a〕〔o〕にむすびつくもの

（「は」「ほ」）が江戸時代に入って［h］となり、最後に残ったものが［ɸ］のむすびつく「ふ」だったと云う事になりそうである。[注124]

この事実は先の筆者の推定を支持してくれるものと見られる。ヘ・ヒにh・çへの変化が起きると、ハ・ホの場合には、Φの発音の負担が大きいために、これも容易にhに変わったのであろう。Φを残す現代方言において、それが特定の音節に片寄って現われないのはそのためではないか。[注125]

3．沖縄方言におけるpの新生

このようにしてΦがç・hへ転じる動きが起きて来た時、沖縄方言のうち、カ行音がhの位置を占めていた方言においては、ハ行音は次のいずれかの形をとるしかなかったものと見られる。

①新しく生じたp音にひかれて、p音に転じる。

②唇歯音fに転じて安定をはかる。

③Φのままとどまる。

ただし、カ行音がhの位置を占めるに至らなかった方言においては、本土方言と同じく、

④ç・hに転じた。

そのために沖縄方言のハ行音は複雑な様相を示すことになっているものと見られる。

沖縄方言のp音がΦ音から新しく生じたものではないかとする解釈は、実は筆者がはじめて提出するものではない。「いちおうの疑問」としては早く亀井孝氏によって考えられていたことなのであった。

琉球のほうで本土のワ行にあたるものを、ある時代にバ行のものと混じたとみることは十分に可能である。そこで、いまここに、琉球のうち、とくに八重山方言は、唇音の摩擦音を閉鎖音化する傾向をある時代にとったものと仮定するならば、それと平行に、ハ行音もかえってfからpへの道をたどったかもしれない。音変化においては、往々にして発音運動における一定の傾向が一類の音韻のうえに同一の力をおよぼして、それらを同一の方向へみちびくからである（中略）

ただし、以上は八重山方言のpが後世の発達であると断定するものではない。おそらく事実としては、pの音はそのままずっと変わらないでとどまっていて、ワ行子音の発音のうえに、唇の安定をたもつ方向へ緊張がたかまり、これを閉鎖音へまでみちびいたものであろう。ワ行子音の閉鎖音化を誘致したものこそ、pにおける唇の閉鎖という調音運動の力であったと、むしろみるべきである（『日本語の歴史1』二九三頁）

筆者は、亀井氏が「いちおうの疑問」とされたことが沖縄方言において起きていたのではないかと考える。亀井氏は、現代本土方言に存するp音を古いp音が残存したものと解釈されたために、右の解釈を「いちおうの疑問」にとどめざるを得なかったのではないかと考えられる。沖縄方言においてp音が新しく生まれた理由が説明しにくいからである。そして、「摩擦より閉鎖のほうが安定感がよい」という理由からだけならば、本土方言においても、沖縄方言と同じくp音が一般語に復活していてよいことになるのである。現代本土方言に存するp音のうち多くの部分を中世になって新しく生まれたものと解釈する筆者の立場から見ると、沖縄方言においては、一般語のハ行音までがp音に転じることとなったと解釈されるのである。金田一春彦博士は、本土方言においてもハ行音がpで実現する例のあることに注目されている。[注126]

内地の方言でハ行に［p］音をもっているところとしては、静岡県安倍郡井川村で、「走る」をパシル、「始める」をパジメルというのが著名である。ただし、その語彙は多くなく、しかも大部分は動詞であ

るところを見ると、オッパシル・オッパジメルのような形への類推に過ぎないものかもしれない。八丈島にも、このような傾向が以前にあったらしい。（一三二頁）

このような例が或いは語頭にpを生じるきっかけの一つであったかも知れない。沖縄方言の或る方言においては、Φの行き場がなかったために、大規模にハ行音Φがp音になったものと推定される。

筆者の解釈に立つと、沖縄方言という一小方言にp・Φ・hのすべてが残存するという不自然さが解消するほか、種々の事象がうまく説明できるように思われるのである。先ずその一つは、右の亀井氏の論中に見える八重山方言におけるw→bの変化である。この変化はΦ→pの変化にひかれたものと考えるとよく理解できる。また二つには、沖縄方言のハ行音の分布からは、pから直接hに転じた方言を認めなくてはならないとされている事実である。中本正智氏は、『琉球方言音韻の研究』の中で次のように述べられている。

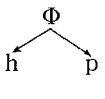
○（柳田補、ア段について）pが直接hに変化している例は宮古の池間方言や与那国方言に観察される。（一七七頁）

○（柳田補、エ段について）先島方言では、数は少ないが、池間方言や与那国方言に観察される。直接にçへ変化したであろう。（一七九頁）

○（柳田補、オ段について）池間方言では、他に〔f〕が存するため、〔p〕は直接〔h〕に変化している。（同前）

○先島方言のうち、p→hの変化は、わずかに宮古池間方言・与那国方言などで観察されるていどである。池間方言におけるp→hの変化は、奄美・沖縄方言のようにFを経ないで、一足とびにhへ変化している。これは音声的な類似音fの存在のためであろう。（一八二頁）

このような事象は、



の変化を考えた方がより自然に解釈できるように思われる。中本氏も、後の論文「古代ハ行p音残存の要因」（先掲）では、池間方言のp→hについて、内部における自然な変化とは見ないで、外部からの影響によるものと説明されようとしている。

（柳田補、宮古の池間島では）ハ行子音がh音化している。たとえば「花」なら、Fを通らずにpから直接hに変化したと考えられる。老人層にはpをとどめる者があるが、Fはみられない。このような方言は、池間と、これから分村した伊良部島佐良浜・宮古島西原に限られている。このようにp音残存の音韻構造を打破していったらには、池間島が宮古で最大の漁村であり、漁業の改革を通して沖縄・本土との接触が多く、進取の精神が旺盛であった文化的な外的要因がはたらいたものと考えられる。（四八頁）

しかし、このような解釈をとると、p音の地域にもっと池間方言と同じ現象が起きていてよいのではないかと筆者には思われる。

沖縄方言のp音をΦから生まれた新しいものと考えてうまく説明できるように思われる三つ目の事象は沖縄方言の各地の方言において、無声子音が後続するヒ・フが、tʃʔu（人）tʔa（蓋）などのように脱落しているという事実である。[注27] これらは、pi·puが脱落したと見るよりは、Φi·Φuからçi·huへの動きの中で、çi·huが落ちたものと考えた方が自然であるように思われる。

四つ目に、伊江島方言において、ヒがtʔi又はtiになっているという事実である。[注28] 伊江島方言では他の段のハ行音はpに実現するという。[注29]

[ti:]（日）[ti:]（火）[titʃai]（額）[t'idʒi]（髯）（下略）
[pa:]（歯）[pana]（鼻）[padaha]（裸）[pasani]（鋏）（下略）
[puku]（袋）[puta]（蓋）[pujiu]（冬）[pujuɴ]（振る）（下略）
[pi:]（屁）[piŋgu]（垢・よごれ）…
[pu:]（帆）[puʃi]（星）[puni]（骨）[puFui]（埃）（下略）

ヒだけが「調音点がかなりちがう」[注130]に変化しているのは、それがΦi→çiの動きの中から生まれたものとしてよく理解できるように思われる。与那国方言のヒがtʃ'iになっており、奄美徳之島方言のヒがʃiになっているのも、Φi→çiの動きの中で生じたものととらえることができるのではないか。

4. 首里方言のハ行音

(1)「語音翻訳」を通して見る

先に触れたところであるが、沖縄方言のうち、ハ行音がp音である方言の場合、それは一般に語頭に現われる。語中のハ行音は本土方言と同じくハ行転呼現象を起こしている。ところが、若干の語については語中にハ行音のp音が存するようである。

しかも、首里・那覇方言は、カ行音がhに転じておらず、従って、ハ行音もp音になっていない方言であるが、この方言においても、語中にハ行音のp音が存することが注目されてきた。

就中pの消滅した首里・那覇でも、現に「吸ふ」をsipuyun、「塩辛し」をshipukarasa、「しほたる」をshiputayun、「濡垂る」の副詞形をsipûtu(supûtu)といってゐるのは、ハ行の古音がpであるといふ説を否定する論者を狼狽させる有力な例証であらう。[注132]

国立国語研究所編『沖縄語辞典』（大蔵省印刷局　一九六三・四）でも、これらの語はp音形で掲出されている。なお、同辞典にはほかにもsipi～sipu～の語が見える。この語中のp音について服部四郎博士は、後二者（柳田補、supuyunとshipukarasaをさす）について伊波氏は「これ第二音節の所にアクセントがある爲にpの音が永く保存されたのであらう」（同書（柳田補『古琉球』）422頁）と云つて居られる。私はsu shiの母音が古く無聲化された爲ではないかとも考へて見た。

とされたが、[注133]首里・那覇方言のこれらのハ行音のp音はどのようなものととらえられるのであろうか。これらのp音が古いp音をとどめているものだとすると、筆者の解釈からは、首里・那覇方言のハ行音は、

p→Φ→p
　　↘p
　　Φ・h

p↘p
Φ→Φ・h

などの変化を遂げたことになってしまうのである。

この問題について考える時、我々は、首里方言については、幸いなことに一六世紀の外国資料をもっているのである。そこで、先ず、「語音翻訳」によって、一六世紀の首里方言のハ行音を見てみたい。ハ行音は次のような音を表わすハングルによって表記されている。[注134]

（表3）「語頭翻訳」のハ行音表記

	語頭	語中	語中、ハ行転呼
ハ	p'a（一四例）	pa（一例）	oa（一例）・u（一例）・ナシ（一例）
ホ	p'ui（一例）		o（一例）
フ	p'u（六例）・pu（一例）	pu（三例）	u（二例）・o（一例）
ヒ	p'i（一〇例）・pi（一例）	pi（一例）	i（一例）

この‘pとpについて、伊波普猷氏は、‘pがΦを表わし、pがpを表わしているものとされた。

朝鮮語には、唇音摩擦音のFが存在しないので、琉球語のFを写すに唇的破裂音のpを似てしたとしたら、其の中からpとFとを選りわけるのが、容易なことでは無いやうに思はれるが、能く考へて見ると、朝鮮語の唇的破裂音には、普通のㅂ（p）以外に有気音のㅍ（‘p）があるので、之を使ひわけて、pとFとを表記してゐることに気がつく。[注135]

これに対して、服部四郎博士は、‘pは‘pを表わすものとされた。

「語音翻訳」では、ほとんど常にハングル‘p（ㅍ）――まれにp（ㅂ）――で表記されている。この‘pを、伊波普猷先生は両唇摩擦音［Φ］を表わすものと解釈されたが、私はこれを［p‘］で転写した。[注136]

いずれの解釈が妥当なのであろうか。結論を先に言えば、筆者は伊波氏の解釈の方に従いたい。

‘p・pを表わすハングルが沖縄方言のどのような音を表わしているのかについて考察するためには、ほぼ同時代に成立した朝鮮資料『伊路波』が本土方言のハ行音をどのようなハングルでとらえているのかということと比べてみる必要がある。この資料でハングルが現われるのは、河野六郎博士が表A・B・Cと呼ばれた三つの部分である。[注137] A・B・Cに分けて、ハ行音の表記を示すと表4の通りである。A・Bはいろは歌の音節を示したものと、一・二・百のそれであるので、語頭の例としてよいであろう。表Cのうち「程」のhoも語頭である。表Cの「ハㅅ」hampaのhaは語中の例か。『伊路波』のハ行音を表わすハングルと比べる時は、「語音翻訳」の方はf・f‘を表わすハングルを用いていず、‘pはΦを表わしていると見ない方がよいように思われる。この点については、服部博士が、先に引用した部分の後に指摘されたところである。

しかしながら、『伊路波』にもヒ・ヒャを表わすのに‘pを用いた例が一例ずつ見えるのである。

一　p‘ito（1ウ3）

百　p‘uya ku（1ウ4）

この『伊路波』の‘pについては次のような解釈がなされている。

○‘pをハ行音にあてることは、軽唇音を有しない朝鮮語としてはむしろ自然な方法と言うべきであって、捷解新語以外にも、例えば琉球語を写した資料として丁度この「伊路波」と相前後する、申叔舟の海東諸国記附載の語音翻訳（弘治十四年）などやはり同様の写し方をしている。[注138]

○現代語でも英語のfに対してこの‘pを用いる。philosophy＝p‘i-ro-so-p‘i〔p‘illosop‘i〕‘film＝p‘ir-rum〔p‘illum〕等々。この‘pにfの近似を感ずるのはその鋭い気音の併存に因るものであろう。「伊路波」において日本語のfi〔Fi〕に対してp‘iを宛てたのも同じ親近感に基づくと考えられる。同じ日本語音に或はfを以てし、或は‘pを以てするのはfは語頭においてはあくまで外国語音の標記に用いられていたもので、朝鮮人の音韻体系の中に有機的に結合していなかったため、その体系中にある‘pを用いたものであろう。fが日本語のsyllabary（A）におけるハ行を示しているに対し、ヒト「一」という語の標記に‘pを用いているのもその消息を暗示すると思われる。[注139]

（表4）『伊路波』のハ行音表記

	A	B	C
ハ	f	f	
ホ	fu	fu	h
ヘ	f‘	f‘	h
フ	f・h	f	
ヒ	p‘		
ヒャ	p‘		

このような考え方に従えば、ハングル‘pがΦを表わしている蓋然性は高

いのである。『伊路波』のf・‘fと‘pとがともにΦを表わしているように、「語音翻訳」の‘pもΦを表わしているものと解されると思う。

しかし、それならば、なぜ『伊路波』と「語音翻訳」との間に用字の相違が生じたのであろうか。そのことを考えるためには、『伊路波』におけるf・‘fと‘pとの使い分けが問題になるのではないか。『伊路波』において、f又は‘fを表わすハングルで表記される中にあって、‘pが交じる理由を先に引用した後者の説のように考えることもできるが、「語音翻訳」における‘pとpとの現われ方をあわせ見ると、以下のような解釈はできないであろうか。

「語音翻訳」のハ行音は次のように表記されている。

語頭 ｛有気音‘pで表記されることが多いが、
　　ヒ・フの場合に無気音pで表記された例が存する。

語中 ｛ハ行転呼現象を起こしている例とともに、
　　無気音pで表記された例がある。

これを、無気音pの現われ方に注目して見ると、次のことが看取できる。

(1) pは語頭のヒ・フに稀に現われることがある。

(2) 語中に現われるのはpのみである。

『伊路波』における‘pに関して注目されるのは(1)の傾向ではないかと思われる。即ち、『伊路波』では、一般にf・‘fで表記される中にあって語頭のヒ・ヒャに‘pの例があり、「語頭翻訳」では一般に‘pで表記される中にあって、語頭のヒ・フにpの例が存するのである。ヒとフとの場合、狭母音が後続するために、本土方言においては、音韻としては他の段のハ行音と同じΦであっても、音声としては破裂性を帯びていたのではないか。そして、沖縄方言においては、狭母音が後続するヒ・フからΦ＞pの変化が起きたのではないか。先にあげた現代首里方言のsipukarasaから見ても、pi・pu表記のものはpを表わしたものと見るべきであろう。一方、「語音翻訳」における‘p表記のものは、本土方言のヒの或る場合と同じように破裂性を帯びたΦだったのではないか。

以上のように考えてよいとするならば、一六世紀初頭の首里方言のハ行音は次のようになっていたと推定される。

語頭　Φであったが、ヒ・フの場合にpが実現する語があった。

語中　ハ行転呼を起こしていたが、稀にpが実現する語があった。

このような状態は、歴史的にどのような位置にあるものと考えられるであろうか。この状態を、すべてのハ行音がp音であったものがΦ音にかわっていく過渡の姿を現わしているものと考えるのは困難なのではないか。語中にp音が残る理由が説明しにくいように思われるからである。筆者の推定では、沖縄方言のp音は、行き場のなくなったΦから、音便や強調によって生じたp音にひかれて生じたものと考えられた。従って、それは語中にも生じてよかったはずである。首里方言において、語中にp音が存するという(2)の傾向があるのはそのためではないか。「語音翻訳」において語中にp音が現われる語は、

apasya（淡）opusi（多）opumici（大路）sipukarasa（鹹）uyapicyu（老甫）

の五語である。このうちpicyuは、伊波氏によると擬声語であるという。[注40] この一語を除く他の四語が形容詞乃至は形容詞性の語であることが注目されるように思う。同じく語中にハ行音の存した語でありながら、なぜ「シホ（塩）」は「語音翻訳」においてmasioの形で現われ、「シホカラサ（鹹＝塩辛サ）」はsipukarasaの形で現われるのか。これは、強調の用法をもつ形容詞にpが生まれたと考えてうまく説明できるように思われる。伊波氏は動詞「吸フ」もあげられているが、これも強調の意で用いられることがあるのではないか。このような推定が当たっているとして、[注41] それが語中のΦの形から生じたものか、ワ行音の形から生まれ

たのかは明らかでない。本土方言について見ると、ハ行転呼現象から取り残されて語中にΦをとどめていた語も若干存する一方、マッポナジのように語中のワ行音がp音形を生み出している語もあるからである。o̯uo（多）ʃi̯uo（塩）の場合、前接母音が同一であるか狭いかであるから、「オ」の音はu̯oであった。

このように解釈することが許されるならば、「語音翻訳」の頃の首里方言においては、Φ音から、

(1)後続母音がi・uの音節

(2)形容詞及び形容詞性の語の語中

の場合に、p音が新しく生まれようとしていたのではないかと推定される。そして、現代の首里方言を見ると、そのp音はハ行音全体をp音にかえるに至らず、かえって衰退し、若干の語の語中に痕跡をとどめているのではないか。

首里方言のハ行音をこのように見ると、沖縄方言の或る方言（名護方言・久高島方言など）[注142]では、そのような状態から、ヒ・フが無気音pである上に、これを追ってハ・ヘ・ホが有気音p'になったのではないか。後続母音が広母音であるために有気音が実現しやすく、三母音化が進んでくると、これを音韻的対立としたのであろう。すべての段がpである方言（奄美大島佐仁方言など）[注143]は、そのpとp'との対立を失ったか、もともと対立を生じなかったかなのであろう。しかし、また、Φuが安定していたから、puにかわらず、イ段とエ段のみがpにかわった方言（沖縄北部塩屋方言など）[注144]や、ウ段をfuで安定されて、それを除く他の段をpにかえた方言（宮古方言・八重山方言）[注145]も生じたのであろう。

以上要するに、沖縄方言においては、すべての方言において、Φがpにかわるという動きが生じたが、或る方言では完全にそれが実現したのに対して、首里方言のように或る方言ではそれがいわばたち消えとなったのではないかと見られる。

(2)『琉球館訳語』に記録されたハ行音

その正確な成立時期は明らかでないが、「語音翻訳」に近い時期に成立したと見られる中国資料に『琉球館訳語』がある。『琉球館訳語』が記録するところから当時の沖縄方言のハ行音の音価を推定することはむずかしいけれども、筆者はΦをとらえているのではないかと解釈する。しかし、伊波普猷氏・服部四郎博士は、この資料がp音をとらえているものとしておられるようであるので、この資料について触れておきたい。ただし、伊波氏は簡単に触れるに過ぎない。[注146]服部博士は、この問題について興味深い論を展開しはじめられながら、実質上筆を折られている[注147]ので、その真意は十分には理解しがたい。しかし、服部説の要点を、筆者の立場から要約すると次のようになる。

(1)「語音翻訳」（一五〇一年）はp・p'のハングルで、『使琉球録』（一五三五年）はpの漢字で表記しているのに対して、『中山伝信録』（一七一九年）はfの漢字で表記しているから、この間にpからΦにかわった。

(2)『日本館訳語』は、fの漢字で表わす中に、pの漢字で表わした例が四文字八例あるが、後者は琉球語が混入したものである。

(3)「これに反し、「琉球館訳語」は、右に論証したように、15世紀――おそくとも16世紀初頭まで――の琉球語を表記したものと考えられるから、その/p/時代を反映しているはずである。ところが、実際は期待に反し、複雑な、しかし極めて興味ある様相を呈している。すなわち、そこに表記されている琉球語は、次の3つのグループに分かれる。

（甲）声母がpあるいはp'の漢字を用いてあるもの

（乙）声母がfの漢字を用いてあるもの

（丙）hw-/hu-/で始まる漢字を用いてあるもの」

博士は、このうち甲の用例を列挙し、その具体例の検討をはじめられたところで筆を折られてしまった。従って、この論が、この後どの方向に展開される予定であったのか、現在のところ、我々には明らかでない。もし、この方向で論が展開されるとすれば、二つの方向が考えられるのではないかと思う。一つは、

①乙のf表記のものを、本土方言が混入したものと見て、沖縄方言のハ行音がpであったと解釈する方向、

であり、もう一つは、

②p・f・hをそのまま沖縄方言をとらえたものと見て、pからΦ・hへ移行しようとする姿がとらえられていると解釈する方向、

である。

①の方向を考えた場合、『琉球館訳語』中のf表記の例のすべてを本土方言が混入したものと見るのは、その（f表記の例の）量から見て、無理があるように思われる。『琉球館訳語』に掲出された沖縄方言の語形を把握することは筆者にとって困難なところがあるが、大友信一・木村晟『琉球館訳語本文と索引』（小林印刷出版　一九七九・三）を参考にして、次にハ行音の表記を類別整理してみる。[注148]

（表5）『琉球館訳語』のハ行音表記

fを表わす字	は	
	法は	
	一六例[注149]	
p'を表わす字	排はい	
	二例	
pを表わす字	抚は	包ほう
	四例	一例
hを表わす字	花は	華は	害はい	合ほう
	五例	三例	一例	一例

	ほ	へ	ふ	ひ	
	夫ほう		福ふ 付ふ 分ぶ	非ひ 分ひ 肺ひい	
四一例	一例		一一例 二例 一例	七例 二例 一例	
	普ほ 盆ほん	漂ひう		品ひ	
九例	三例 一例	二例		一例	
半はん	波ほ	卞へん	不ふ	必	
二例[注150]	二例	一例	一例	一一例	
	活ほっ 賀ほ 活ほ				
一七例	一例 一例 五例				

『日本館訳語』についても同じ表をつくって、これを比べてみると、『琉球館訳語』の方が、p・p'の字を用いることが多いけれども、これだけ多くのf字表記の例を本土方言の混入と考えるのは困難であるように思われる。

（表6）『日本館訳語』のハ行音表記

	は	ほ	へ	ふ	ひ	
fを表わす字	法は 三二例	福ほ 夫ほう 三例 一例		福ふ 夫ぶ 分ふ 一二例 三例 三例	非ひ 分ひゃ 法ひゃ 三四例 四例 二例	九四例
p‘を表わす字			漂へう 一例			一例
pを表わす字	巴はっ 一例	波ほ 五例		不ふ 一例		七例
hを表わす字	華は 一例[注51]	活ほ 賀ほ 活ほっ 二例 一例 一例				五例

一体、『日本館訳語』に見えるp・p‘字表記例を沖縄方言の混入とし、他方『琉球館訳語』に見えるf字表記例を本土方言の混入と見る立場は、本土方言Φ、沖縄方言pという固定観念によって資料を解釈していることになり、余程説得力をもつ根拠がなければ、これらの資料がハ行音の音価推定には使えないということを語っていることになると思われる。

そこで、もう一つの方向、即ち、『琉球館訳語』が、pからΦ・hへ移行しようとしている時期の沖縄首里方言をとらえているという方向を検討してみたい。先に『日本館訳語』と対比して見たように、『琉球館訳語』には確かにp・p‘を表わす字が『日本館訳語』に比べて多用されている。pからΦへ移行しようとする時期の沖縄首里方言をとらえていると解釈するとよく理解できるように思われる。しかし、ここで注目しなくてはならないのは、『琉球館訳語』にはhを表わす字も、『日本館訳語』と同じく、そしてそれより多く用いられていることではないかと思われる。服部博士が考えられたように、「語音翻訳」（一五〇一年）『使琉球録』（一五三五年）の頃p音であった沖縄方言が、成立時期が明らかでないが、それらと遠くは離れていない時期に成立したと見られる『琉球館訳語』の頃に、Φとhとに移行しようとしていたとすると考えると、長くp音であり続けたハ行音がなぜこの時期にΦに移行し、しかも、同時にそのΦからhへ移行していったのかがうまく説明できないように思われる。本土方言において、相当長い期間にわたって行われていたΦが、沖縄首里方言ではほんの一瞬の存在であったことになってしまい、不自然に思われるのである。

もし、この方向の解釈を、なお続けるとすれば、筆者は、既に推定したように「語音翻訳」『使琉球録』の時代の沖縄首里方言のハ行音を、Φが中心で、音声的環境によってpが生まれる動きがあったものととらえ、『琉球館訳語』もそれと同じ状態をとらえているとする解釈ができるかも知れないと思う。ΦからhへのΦの動きがあり、一方、Φからpが生まれる動きがあったと考えると、Φ・h・pを無理なく説明できるからである。

しかしながら、そのように解釈すると、『琉球館訳語』にはpの字が

ア・オ・エ・ウ・イ五段にわたって多用されており、「語音翻訳」の場合と一致しない。また、『使琉球録』の「夷字附」にpの字が統一的に用いられている（ただし、「夷語附」はそのようにはなっていない）[注152]点もうまく説明できない。我々は、ここで、『日本館訳語』の表記に立ちもどらなくてはならないのではないかと考える。『日本館訳語』のハ行音の表記と『琉球館訳語』のそれとを虚心に比べてみると、後者がpを多用する傾向はあっても、f・p・hを表わす文字を三者とも用いているという点では両資料共通しているのである。『琉球館訳語』のf表記例を本土方言の混入と考えられないように、『日本館訳語』のp表記例も沖縄方言の混入とは見ない方がよいのではないか。『日本館訳語』のp表記の場合、その用例数が、p七例、p'一例と少なく、しかも、その中の424「鞋不牙」が、本土方言に見えず、沖縄現代方言の「フヤ」と一致するところから、沖縄方言の混入説が行われてきた。[注153]しかし、その他の七例は、次の例であって、これらの語になぜ沖縄方言が混入しなくてはならなかったのか理解しにくいように思われる。

巴……386法度巴都各（『琉球館訳語』に該当語なし）

波……4星波世（『琉球館訳語』9星波失）28有星波世阿禄（『琉球館訳語』に該当語なし）29無星波世乃世（同前）30星少波世索合乃（同前）31星多波世倭亦（同前）

漂……154葫蘆漂淡（同右）

424「鞋不牙」も『琉球館訳語』の方には399「鞋三扒」と別語で見えるのである。むしろ、方向としては、鞋を表わす「フヤ」という語がかつて本土方言でも行われていたと考えた方が、自然なのではないかと思われる。筆者はいまだ本土の文献に「フヤ」の語を見つけ出し得ていないが、「フミ（踏）ヤリ（遣）」「フミ（踏）ヤ（？）」などの語源が想定してみると、見つかる可能性は高いのではないかと思われる。[注154]このような方向で考えてよいとするならば、『日本館訳語』も『琉球館訳語』も、ハ行音を表わすのに、ともにf・p・hを表わす文字を用いていることになる。そして、これらのf・pはともにΦの音を表わすために用いられているのではないかと見られる。hは、やはりΦを表わすものとも考えられる[注155]が、声門音化のはしりを反映している可能性が高いと考えられる。沖縄方言のh音についてはまた後に触れる。

それにしても、Φの音を表わすのに、fとpとの両方の文字が用いられているのはなぜなのか。それは、もともとΦとpとの音が相近く、連続している音である上に、日本語に、

ハラリトーパラリト、ヒカヒカトーピカピカト……

ヤハリーヤッパリ、ヨホドーヨッポド……

ニホン（日本）ーニッポン、ニホン（二本）ーイッポン（一本）……

などの対が存在しており、更に、日本人自身がハ行とパ行とを書き分ける文字をいまだもっていなかったために、この資料は、二つの音を同一音のゆれとしてとらえているためではないかと思われる。沖縄首里方言の場合には、その上に、語頭のイ・ウ段音がp音に実現する傾向が生じていたために、一層Φとpとが同一音のゆれと意識されたのではないか。更に考えれば、『琉球館訳語』の方に『日本館訳語』よりもpを表わす字が多いのは、沖縄首里方言の方に本土方言よりもp音が実現するケースが多かったことを反映しているのではないかとも考えられる。このように考えると、同じハ行音がfの字でもpの字でも書かれており、しかもその使い分けが認めがたいという事実をなんとか理解することができるのではないかと思われる。

ただし、右のように考えるについて、問題になる点が二つある。一つは濁音バ行音の表記であり、もう一つはパ行音の表記である。大友信一博士によると、『日本館訳語』においては、官話方言によって書かれて

いるために、日本語の清音と濁音とが同じ漢字で書かれているけれども、その中にあって、バ行音だけは、ハ行音を表わす文字で書かれることが稀で、p・ʻpの字で表記されているという。[156]『琉球館訳語』においても、バ行音は一般にp又はʻpの字で書かれている。[注157]

pの字の例

バ…班四例　扒一例　把一例　ハ一例　包二例　ベ…別三例　ブ…不四例　布一例　ビ…必一九例　別二例

ʻpの字の例

ビ…飄一例　飄一例

fの字の例

バ…礬一例

つまり、清音ハ行音にはf・ʻp・p・hの字を用いるけれども、濁音バ行音には一般にp・ʻpを用いており、不十分ながらも清濁を書き分けているのである。この資料が不十分ながらもハ行とバ行との清濁を書き分けているところからすれば、Φとpも書き分けていてよいのではないかという問題があるのである。しかし、この点については、清濁の方は、日本人自身が音韻観念を確立させており、表記の上でもこれを書き分ける習慣を確立させていたのに対して、パ行音の方は音韻としての確立が新しく、その表記法を確立させていなかったということから説明できるのではないかと考えられる。

もう一つの問題点は、今までハ行音の表記ということで除外してきていたのであるが、パ行音がpで表記されているという事実である。『琉球館訳語』に二例、『日本館訳語』に一例見える。

『琉球館訳語』　『日本館訳語』

411葛布 嗑布　該当語なし

486片脳 兵卞　302片脳 兵卞

「嗑布」が「カップ」を表わしておれば、「プ」はp音を表わしていることになる。また、片脳の「兵卞」が言われているように中国語の「氷片」を表わすとすると、これもp音を表わしていることになる。従って、例は少ないけれども、p音を表わすのに、「布」「兵」「卞」といずれもpを表わす字が用いられていることになり、Φとpとを同一音のゆれとして書き分けていないのではないかとする筆者の考えにとって都合が悪い。しかし、この場合、「氷片」はほかならぬ中国語であるから、中国人は当然pの字で表記したものと解される。「嗑布」の方は、促音の後はpが実現することが意識されていたとも考えられるが、一例であるから偶然pの方の字が用いられたとも考えられるのではないかと思われる。

5. ワ行音とバ行音との交替

ここで、ハ行音の変遷にかかわると見られるところの、ワ行音とバ行音との交替する現象について見ておきたい。

Φ音のp音化が起きた沖縄方言の或る方言で、ワ行音がバ行音になっていることは既に触れたが、語中にp音が多く新生した本土方言においても、その動きはやはりあったのではないかと思われる。本土方言においてワ行音がバ行音に転じている例には語中の例と語頭の例とがある。語中のワ行音がバ行音に転じている例については、安田章博士がその高論[注158]の中で、

soụoΦuru（小降）　soụotu（濡）　koụotu（壊）　koụoruru（壊）
ị̀oụoro（丁）　soụoru（戯）　Φotoụoru（煩熱）
utuụo（空）

の例を指摘された（筆者の表記で示した）。[注159]そして、博士は、それらを近世以後の変化ととらえ、変化の原因を関連語からの干渉によるものとされて、次のように述べられた。

他からの干渉がない限り、ホからヲへ、一度弱化の方向を辿ったも

のが回帰する可能性は少ないからである。（九一頁下段）

例えば、koṷori（氷）がkoboriになったりすることがないように、-ṷo＞-boの変化が若干の語にしか起きていないところから見て、博士の推定は妥当なものと思われる。しかし、このような変化が中世末から近世初期に起きているところを見ると、その背後の力として、語中のハ行音（-Φ）又はワ行音が強調等のためにp音になったという変化が作用しているのではないかと筆者は推定する。因みに、通説に従えば[160]、条件表現「～クワ」「～ズワ」が、「～クンバ」「～ズンバ」を経て、近世になって「～クバ」「～ズバ」多用になるとされるが[161]、これも促音・撥音などを挿入して強調する表現が一般化してくると、「～クワ」「～ズワ」にも強調形がつくられ、この場合撥音挿入形を選んで、「～クンバ」「～ズンバ」の形となったものと見られる。促音挿入形を選ばなかったのは、接続助詞「バ」の形にひかれたためであろう。

語頭の例に目を移す。鈴木孝夫氏・遠藤邦基氏は、語頭清音を濁音化させることによって、対象の価値を低めて表現する。次のような語の一群に注目された[162]。

t－d　タマ（玉）－ダマ　トリ（鳥）－ドリ

s－z　サマ（様）－ザマ　スル（擦）－ズル　スレル（擦）－ズレル

k－g　カラ（殻）－ガラ　カニ（蟹）－ガニ　カメ（亀）－ガメ　カワ（皮）－ガワ（側）　コウラ（甲羅）－ゴウラ　コネル－ゴネル

h－b　フレ（振）－ブレ　ハレル（晴）－バレル　ハテル（果）－バテル

このような造語がどのようにして確立することになったかについて考えるためには、それがいつ頃から生じたかについて考察することをぬきにしてはできないと思われる。遠藤氏は『和名抄』の「有田」を「ダ」と解し、このような造語が既にその頃から存したとされたが、筆者は、「有田」を「アリタ」と読むべきであるとし、該当例ではないとされる工藤力男氏の説[163]に従いたい。そうすると、残る最も古い例は『天草版平家物語』に見える「ザマ」の例ということになる。このような語は、遠藤氏が言われるように、「〃褻〃の世界の語であって、原則として〃晴〃の世界の言葉で記された文献類に、そのままの姿を表わすことが無かった」とやはり考えるべきであろう。しかし、又、文献資料を手がかりにするしかない以上、『和名抄』の例が除かれると、室町時代頃まで下がってこざるを得ないとも言える。そこで、このような造語が室町時代頃にはじまったと仮定すると、それはなぜこの期にはじまったのであろうか。擬声擬態語に清濁両形の対応する語があり、これが一般語の対応に何らかの影響を及ぼしたことが当然考えられるが、これが直接の原因であるとすれば、清濁対応語はもっと早くから生じていてよいものと考えられる。また、語頭狭母音の脱落による語頭濁音語「バフ」（奪）（色葉字類抄）「バリ」（尿）（目葡辞書）などの成立もかかわるであろうが、これは背景の力とはなり得ても、清音形から濁音形をひき出す直接の力となったとは考えにくいように思われる。

ここで筆者は、次のような語を想起する[164]。

バカ（馬鹿）←ワカ（稚）[165]

二階へぼひ上げ（近松＝大経師昔暦）←追ひ上げ

ぼい出してのけさつしやれ（近松＝女殺油地獄）←追ひ出す

微々たる例に過ぎないが、これをもって見ると、語中にp音が多く生じ、これにひかれて語中のワ行音がバ行音に発音されるという例が生まれてくると、その動きを背景に、そして語頭濁音語「バウ」（奪）「バリ」（尿）などを背景に、語頭のワ（ṷa）又はo（音韻としてはṷoと同一音であるために、boに転じ得たか）も、バ行音に転じる動きが生じ、これを卑しめる言い方に用いたのが右のような例である可能性が考えられない

かと思う。そして、更に推定すれば、このような形で語頭濁音語が生まれると、他の行にも同じつくりの語が生まれることとなったのではないか。この場合、ナ行音とダ行音の変化（ノラードラ）も力になったものと見られる。先のh－bの例は、Φ－bの段階で生まれたとも考えられ、そう考えた方が音声学的には理解しやすいが、その用例は、今のところ、確たる証拠はないけれども、ハ行音がΦであった時代の例とは見なしにくいように思われる。

以上、ワ行音がバ行音に転じている例を、中世に語中にp音が多く生まれたことに並行する現象の痕跡ではないかと見た。ところで、中世には、逆にバ行音がワ行音に転じている例もあり、むしろその例の方が多いように思われる。この変化はなぜ起きたのであろうか。その早い例は院政・鎌倉時代語資料に見えるようである。佐藤宣男氏は、「クヲ」（陰）（三巻本色葉字類抄）「そわ」（傍）（定家十題百首）「かわかり」（斯計）（広本沙石集）の例をあげられた[注166]。そのほか次の例も知られている。

○力オヨワヌ事ニテアル也（解脱門義聴集記巻二）[注167]

室町末江戸時代初期には例が多くなるようである。偶見したものを若干示す。[注168]

○エラワレタ（選）（国立国会本玉塵四〇22ウ2、ただし、叡山本「エラハレ」）

○択（中略）エラウ（積翠軒文庫旧蔵『三祖大師信心銘抄』、積翠軒図録三八による）

○山ぞわ（死霊解脱物語聞書上11オ9）

○マドロワシメ（詩学大成抄五75オ9、m＞b＞の例か）

○アシカイ（葦牙）（三原図書館蔵日本書紀抄）

○ねたなを（国字本伊曽保物語）『天草版伊曽保物語』にはローマ字でNectenaboと見える。

○山ヲワキワサンデ（脇挟）（叡山本玉塵六8ウ10、ただし、国立国会本「ワキハサンデ」）

○ツリワリ（釣針）（国立国会本玉塵四四50オ6、ただし、叡山本「ツリハリ」）

○ツワキ（唾）小便ナドハ水大ソ（国立国会本玉塵二四27オ9、叡山本も「ツワキ」）

○狼――ト云ハ狼ハ頸筋カサシコワツテチツトモタワマヌソ（蓬左文庫本蒙求抄一14ウ3）

ただし、このうち「ねてなを」は、森田武博士が指摘されているように[注169]、濁点なしに「ねてなほ」と書かれていたものをハ行転呼音に読んでしまったものと解される。「ツリワリ」以下は、複合語の下部要素の語頭の例である（ただし、「サシコワル」は「サシ強ル」とも）から、連濁形のほかに清音形が存し、それがハ行転呼を起こした可能性もなくはない。

それでは、このようなバ行音のワ行音化はなぜ起きていたのであろうか。その例が既に院政・鎌倉時代に存するところから見て、筆者は、ハ行転呼現象-Φ-＞-ɥ-にひかれて、バ行音も唇音性を弱めて、ワ行音化したものと解釈する。それが室町末江戸初期になって更に多くなるらしいところから見ると、その上に、ハ行音が唇音Φから声門音hに変わる動きにひかれて、-ɸ-が-ɥ-になる動きが強まったのではないかと考える。

以上のように考えてよいとするならば、別稿[注170]で不明とした音声ɥo衰退の原因も、少なくともその一部をここに求めることができるかも知れないと考える。ハ行音がΦからhに転じ、これにひかれてバ行音がワ行音に転じる動きが生じると、更にワ行音ɥoも唇音性を捨てて、oに転じる動きをみせることとなったのではないか。

筆者は、ワ行音とバ行音とが交替する現象は、以上のように史的に位

置づけられるのではないかと考える。[注171] ワ行＞バ行の変化と、バ行＞ワ行の変化とがともに生起し、これが交錯したけれども、結局それぞれに安定しているのが現代語であろう。方言によっては、ワ行音とバ行音とがはげしく交錯し、共通語などとは異なる現われ方を示す方言もある。沖縄方言の或る方言と東北方言の或る方言がそれである。[注172]

6．p音の定着——ハ行音とカ行音

論がいくらか横道にそれてしまったが、最後にカ行音のh音化の動きとの関係について考察し、p音の定着について考えておかなくてはならない。既に述べたように、筆者は、Φが、口蓋化によってh・çに移行しようとした時、沖縄方言においてはhの位置をカ行音が占めていたために、行き場のなくなったΦが、語中に成立したp音の動きにひかれて、pになったと考えた。このように考える時には、中本氏が指摘されているように、[注173] 宮古・八重山方言の如く、カ行音がhでなく、kでありながら、ハ行音がp音になっている方言があるという事実をどのように説明するかが問題となる。沖縄方言におけるハ行音とカ行音との分布については、中本氏の調査にくわしい。[注174] その両者の関係を、筆者の立場から、おおまかに表示すると表7のようになると考えられる。この表では宮古・八重山方言だけが問題となるが、更に、沖縄本島北部方言と南部方言との境界に位置する恩納方言と本島南部津堅島方言も問題となる。中本氏によれば、これらの方言でも、カ行音がkであり、ハ行音がpであるからである。筆者は、沖縄方言において、ハ行音とカ行音との交渉・相克が複雑であったために、先の表のように、さまざまの対応関係が生じたものと考える。

そこで、先ずカ行音のh音化の問題について考える。カ行音kのh音化は、沖縄方言において現在それが実現しているところだけでなく、あらゆる方言で起きようとしていた動きであったと、筆者は考える。いな、ひとり沖縄方言においてだけでなく、本土方言においても起きる動きはあり、実際起きてもいたものと考える。ところが、ハ行音Φのhへの動きとの関連で、それが立ち消えになった方言と、確立した方言とが出来たものと考えられる。

中本氏の論考[注175]に見える、例えば、奄美大島名瀬方言のカ行音を見ると、ア段音に後続するkaや、オ段音に後続するkoの場合に、多くhへの変化、更にはその脱落が起きている。

ha:tuki（暁） ha:san（赤い） ……
manna:（真中） ta:sa（高さ） ……
moho（婿） ị oho ị un（憩う） ……
ko:ro（心） no:rị un（残る） ……

広母音a・oと広母音a・oにはさまれた奥寄りの子音kが、それにひかれて口の開きを広くしてしまったのが、カ行音h音化の起こりであったであろう。（次頁図）広母音が後続する時のkは気音を帯びていたと思われるので、一層hになりやすかったと見られる。従って、この変化は、日本語のどの方言においても起こり得たものであったと見られる。本土方言におけるカ行音のh音化の例について

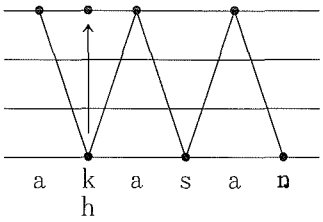
（表7）沖縄方言のハ行音とカ行音

	ハ行		カ行	
奄美方言	h		k	
沖縄北部方言		p		h
沖縄南部方言	h		k	
宮古・八重山方言		p	k	
与那国方言	h		k	

は、金田一春彦「音韻」（先掲）に次のように見える。[注176]

カ行音には、別に、ハ行音に転化している地方があり、琉球の喜界島では、標準音のカ・ケ・コが、ハ・ヒ・フとなっている。沖縄島国頭地方にもこの傾向があり、宮古島ではクに限ってフとなるという。内地では石川県珠洲郡若山村にこの傾向があり、「国鉄バス」と「北鉄バス」との区別ができない。また、語中・語尾のカ行音を、ハ行音に転ずる傾向は、伊豆大島と、千葉県市原郡の一部にある。千葉の安房および上総南部では、語中語尾のカ行音をア行音でいう傾向があり、ハタケ（畠）をハタエ、キク（聞く）をキウという。（一二〇頁）

本土の中世語資料にカ行音のh音化の例を見出せないかというに、今のところ管見に入っていない。カ行音にh音化が起きていても、それをとらえる文字がなかったのであるから、表記の上に現われて来なかったものと考えられる。カ行音をハ行の仮名で書いてある例は[注177]Φの音を表わすはずで、h音化例とは認めない方がよいであろう。本土方言において、ハ行音がh音になった時点では、これを表記することが可能になったのであるが、その時点では、カ行音のh音化がハ行音との混乱をさけて抑止されていたはずである。こう考えると、本土の文献資料にカ行音のh音化例が認めにくいことは理解できるところで、それが起きていなかったということにはならないと思われる。



沖縄方言においても、全方言にカ行音のh音化の動きがあったという点についてはどうであろうか。この点については、『おもろさうし』の例が高橋俊三氏と中本正智氏によって注意されている。

○カ行子音がハ行子音に変化した例とされているものは、底本を何にするかの点や、そのオモロの歌われた地域（久米島）と現在のカ行子音がハ行子音に変化している地域とが重ならない点や、語義の解釈などの点から疑わしい。

①はねのしま〈9の3〉（金の島。仲吉本・田島本によらず、尚家本・安仁屋本の「か」に依るべきである。）

②ぬれはみや〈13の209。久米島オモロ。〉（濡れ髪の人）

③まはない〈12の58。どの地方のオモロか不明。〉（真貢物）（高橋氏[注178]）

○カに対応する音節のうち、一部の語が「は」で表記されている。

はねて、かねて（囲って、守護して）はねのしま、かねのしま（金の島、久米島のこと）

まはない、おまかない（真貢、御真貢）

これらの語は、カを「は」と「か」で複用表記している。これによって、かならずしも首里方言と限定できないけれどすでにk→hの現象があったことがわかる。

はから、はゝら、はうら（兵卒）

この例も、k→h変化の観点から検討してみなければならない。

ただし、『図説琉球語辞典』の言語分布によって現代の方言をみると、k→hの変化が起こっているのは、沖縄北部、久高島、久米島の一部、与論島、沖永良部島、喜界島であり、首里及び沖縄中南部では起こっていない。このことから、「は」で表記されている語は、これらの周辺の方言がまぎれこんだものと解したほうがよさそうである。

k→hの変化は、無気喉頭化音の有無と関係する変化であり、無

気喉頭化音のない首里方言では、過去にこの変化が起こったことは考えられない。

もう一例、久米島の「かさすわかてだ」の美称となっている

ぬれはみや（濡れ髪の人）

がある。「はみ」を「髪」とみれば、k→hの例とみることができるが、仲宗根政善先生のように「ばむ」（～の様子をしている意の動詞をつくる接尾語）の変化形とする見方もある。

カの音節における子音は、k→hの変化とみられる語も混っているが、多くの語においてkであったと判断される。（中本氏）[注179]

しかし、このように、高橋氏はその存在を疑わしいとされ、中本氏は周辺方言音の混入と考えておられるようである。しかし、これは、現代首里方言にカ行音のh音化が実現していないという事実にとらわれすぎているための見方ではないかと思われる。首里方言においても、カ行音のh音化の動きはやはりあったものと考えた方が自然である。[注180] 特定の方言にだけそれが起きた理由を説明することの方が困難であるはずである。なお、「語音翻訳」『琉球館訳語』にその例が見えないのは、それが規範的な形を記録していることと、資料の量が小さいことによるのではないかと見られる。ところで、ここに、『おもろさうし』において、カ行音がハ行音の仮名で表記され得ているところを見ると、沖縄方言のハ行音は既に、h音への変化を相当進行させていたと見られる。そのことは、「語音翻訳」『日本館訳語』からもうかがえたところである。ハ行音のh音化の進行が相当進んでいたからこそ、カ行音のh音化と相克したのであって、『おもろさうし』に、カ行音をハ行音の仮名で写した例があることは、筆者の解釈を支持するものと考えられる。

以上から、カ行音のh音化の動きは沖縄方言のすべての方言で起きていたのではないかと筆者は考える。こうして、カ行音のh音化が進む一方で、ハ行音Φもh音化の方向に進んだために、両者が相克することとなったのである。そして、或る方言では、カ行音のh音化を抑止して、ハ行音のh音化を実現させ、或る方言ではカ行音がh音の位置を占めたために、ハ行音がp音になったのである。この両者の分布は、一般に文化の中心、又はそれに近いところに、それとの連続で、前者が実現し、周辺の地に後者が実現した。沖縄方言の場合、文化の中心は、勿論首里であったが、本土との続きから見れば奄美大島は本土に近い。そのために、分布が先の表のように互い違いになるという複雑な姿を示しているものと見られる。そのように分布を解した時、問題となるのは、最も辺境の与那国方言がハ行h、カ行kとなっているということである。この点については、先に触れたように、与那国方言において語頭のμoがboになっているところから見て、この方言も古くはハ行音がp音になっており、それが衰退したのではないかと筆者は解釈する。即ち、古くは、宮古・八重山方言と同じ状態であったのではないかと考える。そのことは、更に宮古方言の中にも、与那国方言と同じく、カ行音がk音で、ハ行音がh音である方言が存することからも推定される。[注181] しかも、そのうちの池間方言について、中本氏は、「老人層にはpをとどめる者がある」[注182]ことを指摘されているのである。これら以外のp音を残す宮古・八重山方言におけるp音を見ると、この音は、オ段音（pu）とウ段音（Φu）とを区別するのには役立っているけれども、エ段音とイ段音とを区別するのには役立っていない。例えば、エ段pi イ段pi（八重山小浜方言）、エ段pi イ段pi（八重山西表島租納、八重山竹富島）となっている。沖縄名護方言などのpと'pとがオ段とウ段の別、エ段とイ段の別の両方に役立っているのとは異なるのである。このため、宮古・八重山方言のp音は、一部では生きのび、一部では衰退してしまったものと考えられる。

そして、次に、宮古・八重山方言において、カ行音がk音であるのは、カ行音がkからhに動き、ハ行音がΦからhかpへ動いていく相克の中で、カ行音のh音化が進行途中で衰退したものではないかと見られる。宮古・八重山方言の多くの方言では、ハ行音もカ行音もともにh音になるのを避ける結果となったものと見られる。カ行音のh音化が或る方言において進行途中で衰退したのは、それが、オ段音とウ段音、エ段音とイ段音とのそれぞれの区別に一部役立ち、一部役立っていなかったからであると考えられる。

宮古・八重山方言の多くの方言におけると同じく、ハ行音がpでカ行音がkである方言に、沖縄本島北部恩納方言と沖縄本島南部津堅島方言とがある。これらの方言の場合は、ハ行がp音であるのに、カ行がk音であるのは、その地理的位置から見て、文化の中心である首里の方言の影響によって、カ行音がk音となったのではないかと考えられる。カ行のア段とオ段とがhである名護方言（恩納の北方）でも、首里方言の影響を受けてカ行音がkになる例のあることを服部四郎博士が指摘されている。[注183] カ行音の方だけが首里方言の影響を受けたのは、これらの方言では、名護方言の場合から見て、カ行のア段とオ段[注184]のみがh音化を起こしており、他のエ・ウ・イ段がk音をとどめていたために、全般を通じて、k音になりやすかったためと考えられる。それに対して、ハ行音の方はア・オ・エ・ウ・イ五段ともp音になっていたので、首里方言の影響を受け入れにくかったものと見られる。

四、おわりに

以上、沖縄方言の三母音化傾向と、ハ行音のp音とが、ともに京畿における中世語の状態から生じたものであるという筆者の解釈を、本土方言がなぜ三母音化傾向を示さず、ハ行音がp音でないのかということを統合的に説明するという視点をもちながら、論述した。沖縄方言が、史的に見ても、九州方言の隣に位置する方言であることを明らかにし得たのではないかと考える。そして、考察の過程で、従来ばらばらに取り上げられていた、サ行音の音価、エ段音の口蓋化、タ行音の音価、四つ仮名の混同、上代特殊仮名遣甲乙の対立、バ行音とワ行音との交替の問題などの史的意味について統合的に論じた。

沖縄方言の史的位置について論じるためには文法事象にも及ばなくてはならないが、それについては簡略にではあるけれども、別の機会に論じた。[注185] 沖縄方言の文法事象も京畿の中世語の状態から転じたものと見て無理なく説明できるように思われる。

しかし、筆者の解釈は、解釈である以上、或は誤っているかも知れない。日本語の研究に従う方々、特に沖縄方言研究者からのきびしい批正を切望する。

注

（注1）外間守善「沖縄の言語史」（文学　一九六八・一、外間守善『沖縄の言語史』（法政大学出版局　一九七一・一〇）に収む）中本正智「琉球方言母音体系の生成過程――3母音化を中心に――」（国語学八五　一九七一・六、中本正智『琉球方言音韻の研究』（法政大学出版局　一九七六・六）に収む。引用は後者による。）

（注2）亀井孝「わたくしの琉球語への関心と疑問」（『方言学講座四』（一九六一・六）月報、亀井孝『日本語系統論のみち』（吉川弘文館　一九七三・一〇）に収む）。引用は後者による。

（注3）拙稿「ア・ヤ・ワ三行の歴史を、許容された母音連続と許容されなかった母音連続という仮説によって論じ、シラビーム言語からモーラ言語への転換の原因と、拗音の成立とに論及する」（愛媛大学教育学部紀要人文社会科学16

一九八四・二）

（注4）拙稿『音韻脱落・転成・同化の原理』（油印　一九八四・三）

（注5）外間守善「沖縄の言語とその歴史」（『岩波講座日本語11方言』（岩波書店　一九七七・一一）二一四頁）を参勘した。

（注6）前田勇「九州方言に於けるオ列長音の開合に就て」（国語学五　一九五一・二）

（注7）迫野虔徳「オ・ウ段拗長音表記の動揺」（国語国文　一九七五・三）

（注8）外山映次「近代の音韻」（『講座国語史2　音韻史・文学史』（大修館書店　一九七二・九）森田武「音韻の変遷(3)」（『岩波講座日本語5音韻』（岩波書店　一九七七・八）出雲朝子「玉塵抄におけるいわゆるウ列音とオ列音との交替現象について――和語の場合――」（『山田博士古稀記念』国語国文学論集』（雄松堂書店　一九七九・一二）、『玉塵抄を中心とした』室町時代語の研究』（桜楓社　一九八二・一〇）に収む）

（注9）有坂秀世『上代音韻攷』（三省堂　一九五五・七）三八六頁。

（注10）オ段開長音であった語がa:(a)になっている場合もある。

砂糖	sata	sa:ta:	sata	satta:	satta
太陽	tida	ti:da	tida	tida	tidan

沖縄方言のau>a:については、上村孝二「琉球方言の太陽を意味する語について」（鹿児島大学文科報告12　一九六三・一〇）にくわしい。そこでは、現代沖縄方言だけでなく、『おもろさうし』「語音翻訳」にもその例が見えることが指摘されている。オ段開長音は、室町時代の京畿のことばにおいても、a:に実現することがあった。そのことについては拙著『詩学大成抄の国語学的研究』（清文堂　一九七五・九）一〇二頁。柳田征司編『論集日本語研究13中世語』（有精堂　一九八〇・一二）三一三頁参照。なお、上村氏は、ou>a:, en>a:も行われたとして、「南鐐ナンレウ」をあげられたが、この語は『日葡辞書』にもそう見えるように開音「ナンリャウ」であったとすべきものと考えられる。出雲朝子「室町時代における「寮」の字音について」（国語学五四　一九六三・九）参照。

（注11）藤原与一「国語方言に於ける〔ai〕連母音の諸相」（国文学攷三―二　一九三八・二）

（注12）加藤正信・大山貞子「新潟方言における「オ列長音の開合」」（文化21・4　一九五七・七）

（注13）平山輝男他『琉球先島方言の総合的研究』（先掲）

（注14）ロドリゲス『日本大文典』の豊後方言の条に次のような観察が記されている。

○I（イ）の前のE（エ）とO（オ）とをi（イ）に変へる。例へば、Rei(礼)をRii(りい)といひ、Fei(塀)の代りにFii(ひい)，Yoi(良い)をYii(いい)、Fiiqui(ひいき)の代りにFeiqui[3](平気)といふ。

〈3〉Feiqui(平気)の代りにFiiquiといふとあるべきところである。（土井忠生博士訳本六〇八頁）

この記事は、aiから生まれたε:とei:から生まれたe:とが音韻として区別されており、その混同を避けるためにei:から生まれたe:の方がより狭いi:に逃げるという現象が起きていたということを語っている、とそのような蓋然性を考えてみることができないわけではない。このi:がどのようにして生まれたものかについては後考を期さなくてはならない。

（注15）注8外山論文・森田論文。

（注16）拙稿「活用語の語幹末に生じた母音連続（下）」（国語国文　一九八四・四）四五頁。

（注17）注3拙稿八二頁。

（注18）注8森田論文二五八頁。

（注19）拙稿「活用語の語幹末に生じた母音連続（続）（下）」（国語国文　一九八五・六）三三頁。

（注20）亀井孝他『日本語の歴史4　移りゆく古代語』（平凡社　一九六四・七）なお、九州方言をはじめェ段音が口蓋化している方言の分布については、早く金田一春彦「音韻」（東条操編『日本方言学』（吉川弘文館　一九五四・一））に指摘されている。

（注21）Roland A. Lange 'Documentary Evidence for a Palatalized /e/ Series in Middle Japanese' (The Journal-Newsletter of the Association of Teachers of Japanese, April 1969) 同「文献資料に反映した中世日本語ェ列音節の口蓋性」（国語学八五　一九七一・六）後者による。前者は筆者未見。

（注22）浜田敦「弘治五年朝鮮板「伊路波」諺文対音攷――国語史の立場から――」（香川大学開学十周年記念「伊路波」刊行委員『伊路波』　一九五九・五）同「国語史の諸問題――四十年の総括――」（国語国文　一九七七・五）森田武「捷解新語解題」（京都大学文学部国語学国文学研究室編『捷解新語』　一

九五七・一二）同『三本対照捷解新語　釈文・索引・解題篇』（一九七三）解題。注8森田論文。

（注23）その説については後に扱うが、次の論文が早くその立場をとっている。服部四郎『日本語の系統』（岩波書店　一九五九・一）Samuel E. Martin 'Japanische Phonetik. Von Günther Wenck.'（Language 35·2 1959）

（注24）白木進編著『かたこと』（笠間書院　一九七六・五）が「母音転換」に類別する例のうち、e∨iの変化が認められる例を行によって類別すると次の通りである。

ア（ヤ）行　358はぶたい（羽重）432むながい（当胸）536かいる（蝦）584あいもの（和物）678さい（さへ）

カ行　533とかき（竜子）

ガ行　425ざうぎ（象牙）498しゃくなぎ（赤楠花）

ハ行　443たいひいき（太平記）

バ行　488けんびき（痃癖）

セ・ゼの例が見えず、かえって、ケ・ゲ・ヘ・ベの例が見えるが、これらはa段音に後続する例ではないものが多く、別の理由で個別的にe∨iの変化を起こしているものではないかと見られる。

（注25）注3拙稿八二頁。

（注26）馬淵和夫『日本韻学史の研究Ⅱ』（日本学術振興会　一九六三・三）

（注27）馬淵和夫『国語音韻論』（笠間書院　一九七一・四）

（注28）奥村三雄「古代の音韻」（講座国語史2『音韻史・文字史』（大修館書店　一九七二・九）

（注29）注4拙稿二三〇頁。

（注30）注3拙稿。

（注31）浜田敦「拗音」（国語国文　一九六四・五）

（注32）注3拙稿。

（注33）土井忠生「近古の国語」（『国語科学講座Ⅴ』明治書院　一九三四・四）三八頁。

（注34）佐藤喜代治「言語は変化する」（新・日本語講座4『日本語の歴史』汐文社　一九七五・一一）

（注35）佐藤和之「山形県長井方言の「イ」と「ヱ」――FORMANT分析とその知覚――」（国語学研究二〇　一九八〇・五）

（注36）講座方言学『北海道・東北地方の方言』（国書刊行会　一九八二・九）など。

（注37）注36に同じ。

（注38）馬淵『国語音韻論』（先掲）一一五頁。

（注39）奥村「古代の音韻」（先掲）一三七頁。

（注40）注9有坂論文。拙稿「上代東部方言の性格」（愛媛大学教育学部紀要Ⅱ人文・社会科学一九　一九八七・二）

（注41）注16拙稿。

（注42）伊波普猷「海東諸国紀附載の古琉球語について」（国語と国文学　一九三一・三）

（注43）柴田武「音韻」（『方言学概説』（武蔵野書院　一九六二・一一））

（注44）柴田武「方言の音韻体系」（解釈と鑑賞　一九六〇・九）など。

（注45）伊波普猷「琉球語の母音組織と口蓋化の法則」（国語と国文学　一九三〇・八、『伊波普猷全集第四巻』（平凡社　一九七四・一〇）に収む。後者による）中本正智『琉球方言音韻の研究』（先掲）。なお、伊波論文によると、「母音の長短、声の上げ下げ、子音の清濁」なども三母音化による混乱を防いだという。

（注46）服部四郎「日本祖語について4、5」（言語　一九七八・六、七）

（注47）高橋俊三「『おもろさうし』における口蓋化」（『琉球の言語と文化』（中宗根政善先生古稀記念編）一九八二・六）

（注48）注8森田論文。

（注49）上村孝二「九州方言の概説」（講座方言学9『九州地方の方言』国書刊行会　一九八三・三）

（注50）大友信一『室町時代の国語音声の研究』（至文堂　一九六三・五）二三七頁。

（注51）四つ仮名の混乱はェ段音の口蓋化よりも早くから起きていたのではないか、という疑問が出されるかも知れない。確かに個別的には四つ仮名の混乱例は、「クヂラ」「クジラ」（鯨）の例をはじめとして、相当古くから存することが知られている。しかし、それらは、亀井孝「漆桶万里が作の抄もののうちから」（国語学八四　一九七一・三）が解釈した「ナメクヂ」「ナメクジ」（蛞蝓）の例のように、何らかの個別的事情によって近似の音が混乱したものと見るべ

きであると考える。

(注52) 北原保雄『きのふはけふの物語研究及び総索引』(笠間書院　一九七三・二)
倉島節尚「四つ仮名の混乱は「ヂ・ジ」が先行した――咄本『杉楊枝』の例を手懸かりに――」(国語と国文学　一九七七・六)

(注53) 拙稿「抄物に見える擬声擬態の副詞」(愛媛大学教育学部紀要第Ⅱ部人文・社会科学4・1　一九七二・三)

(注54) 平弥悠紀「日本語に於ける有気音と無気音――室町時代以後の中国資料による――」(国語学会昭和60年春季大会発表　一九八五・五)

(注55) 注4拙稿。

(注56) 狭母音が後続する「ヒカヒカト」にもΦ形が生まれているが、これは、「光」「光る」という語が存するからであろう。

(注57) 服部四郎「琉球方言と本土方言」(『沖縄学の黎明』(沖縄文化協会　一九七六・四)

(注58) 外間守善『沖縄の言語史』(法政大学出版局　一九七一・一〇) 同「沖縄の言語とその歴史」(『講座日本語11方言』(岩波書店　一九七七・一一))

(注59) 注45伊波論文二一頁。

(注60) 仲宗根政善「おもろの尊敬動詞「おわる」について」(『沖縄学の黎明』(先掲)

(注61) 高橋俊三「『おもろさうし』に於けるェ段音とイ段音」(沖縄国際大学文学部紀要6・1　一九七七・一〇) なお、高橋俊三「おもろさうしの母音について」(沖縄言語研究センター資料2　一九七八・六) も参照。

(注62) 注47高橋論文。

(注63) 高橋俊三「「おもろさうし」の表記法と音韻」(『尚家本おもろ御さうし』第四分冊付録「解説おもろさうし」　一九八〇・一〇)

(注64) 注47高橋論文。

(注65) 注63高橋論文。なお、注61「おもろさうしの母音について」も参照。

(注66) 注8出雲論文。

(注67) 武井睦雄「朝鮮版「伊路波」に於ける〝ほ〟の仮名について」(国語学四〇　一九六〇・三) による。

(注68) このことについては、注63高橋論文(五八頁) が指摘している。

(注69) 伊波普猷「海東諸国紀附載の古琉球語の研究」(『伊波普猷全集』第四巻) 五二頁。

(注70) 服部四郎「日本祖語について・8」(言語　一九七八・一〇)

(注71) 胤森弘「沖縄語における破裂音(Ki)から被擦音(Ci)への史的考察――中国資料にみる――」(国文学攷一〇二　一九八四・六)

(注72) ただし、本来のイ段音が、ェ段音を表わす音(i-ui)で表記されている例が二例見える。

puui ru(ヒル、蒜、6・5)
'oi puui(オイビ、手指頭、7・9)

音注ならびに所在を示す数字については後にことわるところである。前者の例については、伊波論文(注69) が引くように、『混効験集』に「おむきやうと蒜の事　俗にはへるといふ」とある「へる」の形を示すものと見た。また、後者については、poi に作る本(国会図書館蔵二〇二―四六写本、書陵部蔵一六五―一九五写本) もあるが、伊波論文に従って、pi の誤写と見ておく。

(注73) 本文の解読にあたっては、次の本を参照した。『南島方言資料』の影印は、服部四郎「日本祖語について・7」(先掲) が指摘するように筆が入れられているところがあるようである。

○『海東諸国紀』朝鮮古活字版四冊　内閣文庫蔵(二三三―二)『南島方言資料』影印本の原本。
○朝鮮史編集会編『海東諸国紀』(朝鮮総督府　一九三三・一一)
○京都大学文学部国語学国文学研究室編『纂輯日本訳語』(京都大学国文学会　一九六八・六) 右の本からの再複製。
○『海東諸国紀』江戸時代写本二冊　宮内庁書陵部蔵(二一六―六二)
○『海東諸国紀』江戸時代写本一冊　同右蔵(一六五―三三五)
○『海東諸国紀』江戸時代写本一冊　同右蔵(三五〇―三四一)
○『海東諸国紀』文化五年写本三冊　同右蔵(一六五―一九五)
○『海東諸国紀』江戸時代写本一冊　内閣文庫蔵(二九二―一四七)
○『海東諸国紀』江戸時代写本一冊　同右蔵(二九二―一四九)
○『海東諸国紀』江戸時代写本二冊　国立国会図書館蔵(一七六―一二)
○『海東諸国紀』江戸時代写本一冊　同右蔵(二〇二―四六)

(注74) 河野六郎「「伊路波」の諺文標記に就いて――朝鮮語史の立場から――」(『伊路波』(先掲))

(注75) t'yəン（天）の例……4・1、4・2、4・4、4・4、4・5
(注76) サkui（酒）の例……3・2、3・3、3・5、5・5、5・5、5・6、5・6、5・7、5・7
(注77) アkui（上げ）の例……5・8
(注78) アmui（雨）の例……4・3
(注79) ハni（晴）の例……4・3、4・4
(注80) この語の諺文表記の解読については浜田敦氏のお教えをいただいた。本稿全体についての責任が万一同氏に及ぶことがあってはいけないと恐れ、場所を得ないけれども、ここに明記して謝意を表するものである。
(注81) 胤森弘「『琉球館訳語』の編纂時期試考――「語音翻訳」との比較において――」（国語学会中四国支部大会　一九八三・一一、発表資料）
(注82) 筆者も同じ調査を行ない、行ごとに集計した結果をもっているが、胤森氏の研究成果の公表されるのを待ちたい。氏の研究は、『語音翻訳』におけるo∨uの例のパーセンテージを出し、『琉球館訳語』におけるo∨uの例のパーセンテージと比べて、その大小によって、二資料の成立の前後を推定しようとされたものである。
(注83) 高橋俊三「十八世紀初期の沖縄方言の音韻」（沖縄国際大学文学部紀要一五　一九八一・一）
(注84) 早くは注23・21所引論文がある。更に次の論文がある。
服部四郎「上代日本語の母音体系と母音調和」（言語　一九七六・六）
同「上代日本語のいわゆる〝八母音〟について」（日本学士院紀要34・1　一九七六・六）
同「上代日本語の母音音素は六つであって八つではない」（言語　一九七六・一二）服部第四論文と略称。
松本克己「古代日本語母音組織考――内的再建の試み――」（金沢大学法文学部論集　文学篇22　一九七五・三）松本第一論文と略称。
同「日本語の母音組織」（言語　一九七六・六）松本第二論文と略称。
小倉肇「推古期における口蓋垂音の存在」（言語研究七一　一九七七・三）
山口佳紀『古代日本語文法の成立の研究』（有精堂　一九八五・一）
ただし、これらの説は、甲類の音声を子音の口蓋音とする点においては共通するけれども、異なる点もある。キ・ケに例をとって示すと次の通りである。

	キ甲	キ乙	ケ甲	ケ乙
服部説	/kɨj/	/ki/	/kje/	/ke/
	[kɨ]	[kʲi]	[kᵊe]	[kᵊe]
服部第四論文説	/kɨj/	/ki/	/kɨe/	/ke/
	[kɨ]	[kʲi]	[kʲe]	[kᵊe]
松本第一論文説	/ki/	/ki/	/kje/	/ke/
	[kɨj]	[kɨjiのよな]	?	?
松本第二論文説	/kɨj/	/ki/	/kje/	/ke/
	?	[kui]どうか	?	?
山口説	/ki/	/kəi/	/ke/	/kəe/
	[kji]	[kəi]	[kje]	[kəe]

（ただし、一五〇頁注(1)には第二論文説の可能性も示唆）

(注85) 大野晋「上代日本語の母音体系について」（言語　一九七六・八）六五頁。
(注86) 橋本進吉『国語音韻史』（岩波書店　一九六六・一）二三一頁。河野六郎「朝鮮漢字音の一特質」（言語研究3　一九三九・九、『河野六郎著作集2』（平凡社　一九七九・一一）による）「有坂博士と所謂「重紐」論」（『河野六郎著作集2』）有坂秀世『上代音韻攷』（三省堂　一九五五・七）
(注87) 有坂秀世「カールグレン氏の拗音説を評す」（音声学協会会報49・51・53・58　一九三七・一一、一九三八・三、七、一九三九・七、『国語音韻史の研究増補新版』（三省堂　一九五七・一〇）による）河野六郎「朝鮮漢字音の一特質」（前掲）
(注88) 三根谷徹「韻鏡の三・四等について」（言語研究22・23　一九五三・三）
(注89) 服部四郎「中古シナ語の研究」（『日本の言語学七　言語史』（大修館書店　一九八一・一一））
(注90) 河野六郎「有坂博士と所謂「重紐」論」（前掲、二三六頁）は、舌音などにおいて字音に重紐の対立がなかったために、上代日本語の甲乙がキギヒビミにしか書き分けられていないのではないかとする考え方を示されている。亀井孝他『日本語の歴史4』（平凡社　一九六四・七、六頁）もその考え方に従っている。或いはそのように考えるべきものであるかも知れない。
(注91) 河野六郎「朝鮮漢字音の研究」（『河野六郎著作集』（平凡社　一九七九・

一一）四三一頁）平山久雄「中古漢語の音韻」（『中国文化叢書1言語』（大修館書店　一九六七・一一）一五一頁。

（注92）森博達「唐代北方音と上代日本語の母音音価」（同志社外国文学研究28　一九八一・二）同「漢字音より観た上代日本語の母音組織」（国語学一二六　一九八一・九）同「服部四郎氏の批判へ」（『言語　一九八三・一〇）

（注93）平山久雄「切韻における蒸職韻と之韻の音価」（東洋学報49・1　一九六六・六）

（注94）この点を森氏が無視されているわけではない。森氏は、頭子音の側から拘束を受けて、乙に重紐乙類（B類）字が用いられたものと解釈されている（「唐代北方音と上代日本語の母音音価」二四頁）。ただし、その解釈については、日本語のハ行音の音価をどのように推定するかがかかわるが、Φと考えると、中国語の重紐乙類（B類）の頭子音p・p'と、C類の頭子音f・f'とにおいて、両唇音故に乙類（B類）音の方がふさわしかったと見ることは必ずしも妥当でないように思われる。

（注95）服部四郎「中古漢語音と上代日本語音――paper phonetics的思考を防ぐために――」（『言語　一九八四・二）

（注96）林史典「昭和57・58における国語学界の展望　音韻（史的研究）」（国語学一三七　一九八四・六）

（注97）有坂秀世『上代音韻攷』四三六頁。

（注98）なお、大野晋博士は、「上代日本語の母音体系について」（前掲、六五頁以下）において、イ段・エ段の甲乙の違いを子音の口蓋音対非口蓋音の対立とする説に対して、完了の助動詞「リ」が上二段活用動詞に接続しないという事実をこの説がどのように説明し得るのかという疑問を提出しておられる。筆者も、イ段乙の音が転成母音であったために、これに更にaが続いて再転成することができなかったものと解釈する（拙稿『音韻脱落・転成・同化の原理』（先掲）ので、イ段乙が甲と同じくiであったならばこの場合も転成を起こすはずで、従って上二段活用動詞にも完了の助動詞「リ」が接続していてもよいはずであると考える。しかし、この点については、服部博士は次のように説明しておられる。

「キ乙」がまだその前身の*kui,　*köi（或いは*kəi）であった時代に*tukui＋*ariというような接合が避けられたと考えればよいのではないか。「キ乙」が古い昔から（/kji/に対立する）/ki/であったと考えるのは誤りであろう。（「上代日本語の母音音素は六つであって八つではない」七七頁）

なお、もう一つ触れておきたいことがある。松本第一論文は、kje対keなどの対立を、ヤ行の/je/対ア行の/e/の対立に対応するものと見、エ段甲乙の区別の消失をヤ行とア行のエの混同と並行する現象と見ておられる（一一七・一一八頁）。筆者は、注3拙稿「ア・ヤ・ワ三行の歴史を…」においてア行とヤ行のエの混同について論じたが、これと上代特殊仮名遣甲乙の消失とは別の現象ではないかと見られる。また、松本第一論文においてはイ段について甲乙を母音の違いと見ているから問題ないが、第二論文のようにイ段をもkji対kiなどの対立と見ると、エ段の場合と統一性を欠き、橋本進吉博士の指摘された問題点をもつことになる。

日本に於ては阿行と也行との「い」の区別もしてをらぬのにki, kjiを区別したとはかなり疑はしい。（『国語音韻史』二三一頁）

そこから、服部第四論文は、甲乙とア・ヤ行とを切り離しておられる。

（注99）有坂秀世『上代音韻攷』（先掲）服部四郎『日本語の系統』（先掲）大野晋『日本語をさかのぼる』（岩波新書　一九七四・一一）「万葉時代の音韻」（『万葉集大成6言語篇』（平凡社　一九五五・五）では、エ段乙を「非円唇中舌半狭母音ə」としておられる。

なお、橋本進吉博士は、「国語音声史の研究」（昭和二年度）で、

i, ü̈i, e, ü̈e, o, ü̈o

かとされ（『国語音韻史』一五九頁）、「国語音声史」（昭和七年度）で、

i, üi, e, üe, o, üo

かとされ（『国語音韻史』一五九頁）、「国語音声史」（昭和七年度）で、

i（又は ji), ü,e（又は je), ε（又は æ,ai,ïe）かとされたが、服部四郎『日本語の系統』同「上代日本語の母音体系と母音調和」によると、後、エ段については、

e, əi

と考えられたという。有坂説に近い考えをもたれたものかと考えられる。

（注100）亀井孝他『日本語の歴史別巻言語史研究入門』（平凡社　一九六六・六）一〇七・一〇八頁。小倉肇「上代イ列母音の音的性格について」（国学院雑誌一九七〇・一一）

（注101）注3拙稿「ア・ヤ・ワ三行の歴史を…」参照。
（注102）森「漢字音より観た上代日本語の母音組織」（先掲）
（注103）松本「日本語の母音組織」（先掲）服部「上代日本語のいわゆる〝八母音〟について」（先掲）
（注104）城生佰太郎「現代日本語の音韻」（『岩波講座日本語5音韻』（岩波書店　一九七七・八）一二四頁。
（注105）伊波普猷「琉球群島の単言」（東京人類学会雑誌二二五　一九〇四・一二）「琉球人の祖先に就いて」（琉球新報　一九〇六・一二、『古琉球』に収む。『伊波普猷全集』一（平凡社　一九七四・四）による）「p音考」（『古琉球』（一九一一・一二）、『全集』一による）「琉球語の母音組織とロ蓋化の法則」（国語と国文学一九三〇・八、『南島方言史攷』に収む、『伊波普猷全集』四（平凡社一九七四・一〇）による）「海東諸国記附載の古琉球について」（国語と国文学一九三一・三）「語音翻訳釈義――海東諸国記附載の古琉球の研究――」（『金沢博士還暦記念東洋語学乃研究』一九三三、『南島方言史攷』に収む、『全集』四による）
（注106）本土方言においてΦ音をとどめている方言については、次のような報告が管見に入った。ほかにも多いことかと思う。方言研究者の教示を得たい。
金田一春彦「音韻」（東条操編『日本方言学』吉川弘文館　一九五四・一）
Φを残す方言（Φuは除く、沖縄方言を除く）……山形県各地（殊に北部）、秋田県・青森県の各地、岩手・宮城・福島県の山間部、新潟県の西・中・南蒲原郡以北、島根県出雲地方、宮崎県西北部
亀井孝他『日本語の歴史4移りゆく古代語』三一一頁は、これによって分布を示していると見られる。
柴田武「方言の音韻」（『日本民俗大系10口承文芸』（平凡社　一九六二・四）二三方言を挙げた中、秋田県鹿角郡花輪町、山形県鶴岡市、山形県西置賜郡小国町、島根県穏地郡都万村、島根県出雲市、宮崎県北諸県郡高城町
『講座方言学4北海道・東北地方の方言』（国書刊行会　一九八二・九）
青森県の方言（此島正年氏執筆）二二六頁。
秋田県の方言（佐藤稔氏執筆）二八五頁。
山形県の方言（斎藤義七郎氏執筆）三一七頁。
（注107）因みに、上田博士の弟子たちは、p音に強い関心をよせており、新村出博士に、「琉球語の波行音の変遷」（『東方言史叢考』岩波書店　一九二七・一二）「波行軽唇音沿革考」（国語国文の研究　一九二八・一、『新村出全集』四（筑摩書房　一九七一・九）に収む）「国語に於けるFH両音の過渡期」（『三宅博士古稀記念論文集』一九二九・一〇、『新村出全集』四に収む）、橋本進吉博士に、「波行子音の変遷について」（『岡倉先生記念論文集』一九二八・五、『国語音韻の研究』（橋本博士著作集四）（岩波書店　一九五〇・八）に収む）「駒のいななき」（『国文学叢話』一九四四・一一、『国語音韻の研究』に収む）「国語音韻変化の一傾向」（『国語音韻の研究』に収む）がある。
（注108）服部四郎「奄美群島の諸方言について――沖縄・先島諸方言との比較――」（人類科学Ⅸ、『日本語の系統』第七刷二八三頁による）。なお、沖縄方言のハ行音を問題にするについて、カ行音をもあわせて取り上げたのは、伊波氏（「琉球群島の単言」「p音考」）が早い。そのことについては、服部四郎「日本祖語について・4」（言語　一九七八・六）が指摘している。
これは明らかに明治三十一（一八九八）年の上田萬年の論文「語学創見」に見える「p音考」の影響を受けたものであるが、*kをも取り上げた点が注意される。
ただし、伊波氏はカ行音とハ行音との間に因果関係のあることは指摘していない。
（注109）服部博士の後の論文「日本祖語について・16」（言語　一九七九・六）では、このことが次のように述べられて、前半部ではカ行音とハ行音との因果の関係が逆に読めるようにも述べられている。しかし、『日本語の系統』を参勘するように指示する点と、後半部の説明からすると、『日本語の系統』と同じ意に読み取るべきものと思われる。
一般に、奄美群島、沖縄群島の諸方言では、概略的に言って、
*p→/h/
という変化が起こった方言では、*kは破裂音のまま保たれ、この変化の起こらなかった方言で、
*k→/h/
という変化が起こった。と言えそうである。喜界島全域が*k→/h/という音韻変化の起こっている地域であるから、従って、その全域が*p音保存の地域であったはずで、この島の一部で起こった

〔P-〕→〔Φ-〕→〔h-〕

という音韻変化は、近い過去に始まったものに違いない。

(注110) 中本正智『琉球方言音韻の研究』(先掲) 同「古代ハ行p音残存の要因——琉球に分布するp音について——」(国語学一〇七　一九七六・一二) 同「南島方言の概説」の中「琉球方言の音韻」(『講座方言学10沖縄・奄美の方言』(国書刊行会　一九八四・五)。引用は『国語学』の論文によった。

(注111) 拙稿「活用語の語幹末に生じた母音連続(続)(上)」(国語国文　一九八五・五)

(注112) ハ行音に関して、亀井孝氏には次の諸論考がある。

○琉球方言の史的地位(方言研究二　一九四〇・一、『亀井孝論集』2に収む)

○国語の変遷と歴史(要旨)(国語学一七　一九五四・八)

○室町時代末期の/Φ/に関するおぼえがき(国語研究三　一九五五・七、『亀井孝論集』3に収む)

○古代日本語の間投詞(講演記録)(国語研究八　一九五八・一一、『論文集』3に収む)

○春鶯囀(国語学三九　一九五九・一二、同前)

○お馬ひんひん(国語国文研究一五　一九六〇・二、同前)

○在唐記の「本郷波字音」に関する解釈(国語学四〇　一九六〇・三、同前)

『亀井孝論文集』3付記、ならびに馬淵和夫「円仁『在唐記』梵字対注の解釈について」(国語学四二　一九六一・二)参照。

○古代人のわらひごゑ(日本古典文学大系月報37　一九六〇・五、同前)

○わたくしの琉球語への関心と疑問(方言学講座四月報　一九六一・六、『論文集』2に収む)

○『日本語の歴史4移りゆく古代語』(平凡社　一九六四・七)

○『日本語の歴史5近代語の流れ』(平凡社　一九六四・一一)

○ハワからハハへ(言語文化四　一九六七・一一、『論文集』3に収む)

○『クリフォード琉球語彙』(勉誠社文庫　一九七九・一二)

亀井氏は、早い論文「琉球方言の史的地位」では通説に従っておられるようである。

(注113) 亀井「春鶯囀」「古代人のわらひごゑ」(注112参照)

(注114)『日本語の歴史5』六四頁。

(注115) 拙稿『音韻脱落・転成・同化の原理』(先掲)

(注116) 服部博士は、この考えを早く「音韻論から見た国語のアクセント　補説」(国語研究　一九五五・六、『言語学の方法』(岩波書店　一九六〇・一二)による)の中で述べられている。

(注117) 注112所引馬淵論文。

(注118) 注115。

(注119) 大友信一「日本語音韻体系における/h/音素の成立」(音声の研究一〇一九六三・一)

(注120) 亀井孝「室町時代末期の/Φ/に関するおぼえがき」(先掲)

(注121) 亀井孝「古代日本語の間投詞」。なお、森田武「キリシタン資料におけるハ行音のローマ字表記」(国語国文学論集一三　一九八四・六、森田『室町時代語論攷』(三省堂　一九八五・五)に収む)参照。

(注122) 亀井氏も直接的な力として指摘されているわけではない。

(注123) 注119に同じ。

(注124) 浜田敦「音韻論的解釈」(国語学二四　一九五六・三)七六頁。大友信一『室町時代の国語音声の研究』(至文堂　一九六三・五)六九九頁は、ホ・ヘ・ヒが早かったとする。

(注125) 注106。

(注126) 金田一春彦「音韻」(先掲)

(注127) 中本正智「琉球方言の音韻」(注110)二二頁。

(注128) 注110中本論文。

(注129) 中本『琉球方言音韻の研究』一六九頁。

(注130) 注129。

(注131) 注129。

(注132) 伊波普猷「琉球語の母音組織と口蓋化の法則」(先掲)三二頁。なお、「p音考」「琉球人の祖先に就いて」にも同趣旨のことが見える。

(注133) 服部四郎「「琉球語」と「国語」との音韻法則(二)」一七頁。

(注134) 次にその具体例を列挙する。ハ行転呼の例は、語源が明らかなものに限った。p'i p'at ci(火盆)(7・5)のp'atは濁音表記の誤脱と見て例に加えなかった。ui pui(手指頭)(7・9)のpuiも濁音表記の誤脱と見た。

語頭の例

ハ p'a……p'a ri tyəi(晴れた)(4・2)p'a ri tyəi(晴れた)(4・3)p'a(原本 p'i)rit̬ ti(晴れて)(4・4) p'aru(春)(4・9) p'ai(拝)(5・3) p'a(原本 p'i)si(筋(箸))(7・2) p'aci(木貼是(鉢))(7・3) p'a u ki(箒)(7・4) p'a ka ma(袴児)(7・5) p'a nya(柱)(7・7) p'a na(鼻)(7・8) p'a(歯)(7・10) p'a na(原本 ra)(花)(7・10) p'a mu(蛇)(8・3)

ヘ p'ui……p'ui ru(蒜)(6・5)

フ p'u……p'u na(原本 ra)mo to(船元)(2・7)p'ut tyəi(降って)(4・2) p'u ri(降り)(4・3) p'u yu(冬)(4・10) p'un ti(筆)(6・8) p'u rui(篩)(7・2)

pu……pu tyəi cɐ(一つ)(3・1)

ヒ p'i……p'i c'yu(人)(1・2、1・3) p'i cyo(人)(3・9、3・10) p'ir ma(昼間)(4・7)p'i ru(昼)(4・8)p'i(火)(4・9)p'i saŋ ka(靴)(7・2) p'i p'at ci(火盆)(7・5) p'i sya(足)(7・9)

pi……pi cɐ cya(羊)(8・2)

語中の例

ハ pa……a pa sya(淡)(6・7)

フ pu……o pu si(多し)(2・9) o pu mi ci(大路)(5・4) si pu(原本 pa)ka ra(原本 na)sa(醎)(6・7)

語中、ハ行転呼の例

ハ……a oa(粟)(5・9) p'a u ki(箒)(7・4) k'a ra(瓦)(7・6)

ホ……ma si o(塩)(6・3)

フ……iu(言ふ)(1・4) kui ni(原本 ri)u(昨日)(4・10) kuyo o(今日)(4・10)

ヒ……k'ai(匙)(7・2)

(注135) 伊波「海東諸国記附載の古琉球の研究」五四頁。

(注136) 服部四郎「日本祖語について・13」(『言語 一九七九・三)

(注137) 河野六郎「「伊路波」の諺文標記に就いて」(先掲)

(注138) 浜田敦「弘治五年朝鮮板「伊路波」諺文対音攷」(先掲)

(注139) 注137に同じ。

(注140) 注135論文一二一頁。

(注141) 語中にp音をもつ語がほかにも多く存するのかどうか、存するとして、それらを含めても筆者の解釈が成り立つのかどうか、沖縄方言研究者の検討を望む。また、語頭にp音をもつ方言の一々についても、語中にp音をもつ語の有無、語例の検討を望む。生塩睦子「沖縄諸島(属島)の方言」(『講座方言学10沖縄・奄美の方言』国書刊行会 一九八四・五)によると、語頭にp音をもつ伊江島方言においても、次のような語に語中のpが認められるという。

〔ʔup'iʃa〕(大きい)〔ʔapp'asa〕(味がうすい)〔ʔup'o:sa〕(多い)

〔ap'e:juŋ〕(水っぽくなる《酢・酒など》)

〔ɲa:p'i〕(もっと)〔ʃip'ujun〕(吸う)

〔t'o:p'u〕(とうふ)

〔ʔapp'asa〕は促音挿入形か。これを見ると、促音の認められない例も、その原形として促音挿入形を想定できるように思われるが、そのような推定が許されるかどうかも教示を得たい。

(注142) 中本『琉球方言音韻の研究』一六六頁。

(注143) 注142に同じ。

(注144) 注142に同じ。

(注145) 注142に同じ。

(注146) 伊波普猷「p音考」ならびに、その一九四二年の追記。

(注147) 服部四郎「日本祖語について・13~21」(『言語 一九七九・三~一一)

(注148) パ行音を表わしていると見られる411「葛布(蔭布)」と486「片脳(兵卜)」とは除いた。この語については後述。

(注149) 241「香盒(稱法个)」272「金粉盒(孔加尼法个)」273「金粉盒(南者法个)」274「硯瓦盒(孫司立法个)」を、大友・木村前掲書は連濁形「~バコ」とするが、fを表わす「法」字が用いられているので、濁音「バ」とは見ないことにした。後の注157参照。

(注150) 大友・木村前掲書は「バン」、服部「日本祖語について・14」は「ハン」とする。筆者は清濁を決し得なかったが、仮りに「ハン」に従った。

(注151) 146「葉(急郭葉)」を服部「日本祖語について・13」六頁に従って、「華」の誤写かと見る。

(注152) 「夷字附」と「夷語附」とのずれについては、胤森弘「『使琉球録』における「夷字附」と「夷語附」の表記音の矛盾について」(国文学攷一〇七 一

九八五・九）があり、「夷語附」の方に「大和語音」の混入があるとしている。又、『日本館訳語』との関係も考えている。筆者は、以下に見るように異なる考え方をした。

（注153）その説を最初に示したのは、伊波普猷「『日本館訳語』を紹介す」（方言二―九　一九三二・九、『伊波普猷全集』四）である。

（注154）東条操『全国方言辞典』には、「ふみこみ→ふんごみ　ごむ足袋。愛知県東加茂郡」「ふんごみ（中略）わら製の雪沓。長野県善光寺平地方・鳥取」「ふみもの　履物。はきもの。佐賀。ふんもん　熊本県南関・鹿児島」と見える。

（注155）大友信一『室町時代国語音声の研究』（至文堂　一九六三・五）三二八頁は、Φの音を表わす適当な文字がなかったのだろうとされている。しかし、『琉球館訳語』の「花」「華」の場合は、「法」の文字があるから、そのようには考えられない。

（注156）大友信一『室町時代国語音声の研究』（先掲）三三六頁・三三七頁。

（注157）注149参照。

（注158）安田章「ハ行転呼音の周辺――ホの場合――」（文学　一九七四・一一）

（注159）ワ行音がバ行音に転じた例はほかにも存することと思われる。「ヅバイ」（楚）（山鹿本句双紙抄47ウ3）もその例か。

（注160）佐藤宣男「『ずは』についての問題点」（文化二九・四　一九六六・三）は、「～クバ」「～ズバ」の形を原形と見る注目すべき解釈を示している。この点については、機会を改めて考えなおしてみなくてはならない。「～クワ」「～ズワ」と「～クバ」「～ズバ」のいずれが原形であっても、この事象がワ行音とバ行音との交替という視点からも注目すべき事象であることはかわらない。

（注161）坂梨隆三「近代の文法Ⅱ（上方篇）」（『講座国語史4文法史』大修館　一九八二・一二）

（注162）鈴木孝夫「音韻交替と意義分化の関係について――所謂清濁音の対立を中心として――」（言語研究四二　一九六二・一〇）遠藤邦基「濁音減価意識――語頭の清濁を異にする二重語を対象に――」（国語国文　一九七七・四）

（注163）工藤力男「言語資料としての和名抄郷名――音訓交用表記の検討――」（岐阜大学教育学部研究報告人文科学二七　一九七九　二）

（注164）先の「バレル」が、「ハレル」でなく、「ワレル」（割）に対応する語であるならば、これもここに加えることができる。

（注165）楳垣実『猫も杓子も』（関書院　一九六〇・九）亀井孝「かなはなぜ濁音専用の字体をもたなかったか――をめぐってかたる」（一橋大学研究年報人文科学研究一二　一九七〇・三）一三頁。

（注166）注160論文。なお、氏は、「カヲワセ」（皂）（法華経義疏長保点）「オヲホル」（溺）（興福寺本三蔵法師伝）の例もあげられているが、これらは古くは清音形「カホハセ」「オホホル」であったかと見られているから、そのハ行転呼例と見るべきか。

（注167）小林芳規「中世片仮名文の国語史的研究」（広島大学文学部紀要特輯号三　一九七一・三）八五頁指摘。金沢文庫は原本の調査を許可されなかったが、同文庫所蔵の紙焼き写真で確認することができた。

（注168）橙を表わす語は、カブチ・カフチ・カウチ・カウヂ・カウシ・カウジ・カウト・カフトなどの語形で現われる。これもこの現象にかかわる例か。山田忠雄氏は、この語が節用集諸本にさまざまの形で現われることを教示された。

（注169）日本古典文学大系『仮名草子集』頭注（三八七頁）

（注170）注3拙稿。拙稿「日本語音韻史の構想」（愛媛大学教育学部紀要第Ⅱ部人文・社会科学一七　一九八五・二）

（注171）抄物にはワ行の仮名に濁点を付した例が散見する。

○清一ハ天一気ニモ詩韻ノ「ニモ境一致ノ「ニモ云タソキラリトキツハトサヴ〳〵トシタ」ソ（国立国会本玉塵二三30ウ1、ただし、叡山本「サヴ〳〵」）

管見に入ったこのような例が少ないから、その位置づけはむずかしいけれども、やはりバ行音とワ行音とが行き来する現象を背景に生じたものではないかと思われる。

なお、虎明本狂言に「うんざう」を「ぶんざう」に記憶してしまった例が見える。

それはうんざうがゆ（温糟粥）と云物の事にてあらふず、今の物がたりはぶんざう（文三）（文三　一238・4）

「あをのり」（青苔）を「ただのり」（忠度）と覚える狂言の登場人物のことである（虎明本狂言＝忠度）から、この例をもってワ行音がバ行音に近く発音されていたなどというのではないが、このような例も、やはりバ行音とワ行音との行き来が盛んであったことを背景にして成り立っていたものと見てよいのではないか。

（注172）川本栄一郎「富山県庄川流域における「ワ」と「バ」の分布とその解釈」（国語学研究一二　一九七三・三）
（注173）中本「古代ハ行p音残存の要因」（先掲）
（注174）注110。
（注175）中本『琉球方言音韻の研究』（先掲）
（注176）大藤時彦氏は、一九八五年一〇月二三日付の筆者宛書翰で、次の教示をされた。

p音考のことは伊波先生からよくうかがっていました。小生が民俗調査中面白く思ったのは伊豆大島で猫のことをk子音が脱落してネホと申していることで、たしか能登半島にもその例があった筈です。

（注177）古い例としては、上代に、フクムーフフム（含）、ノコギリーノホギリ（鋸）の対応例などが知られており、『片言』に、フスブルークスボル（燻）、クワクランーハクラン（霍乱）の例が見えることもよく知られている。
（注178）高橋俊三「「おもろさうし」の表記と音韻」（先掲）六八頁。
（注179）中本正智「おもろ時代の仮名遣からみた音韻」（沖縄文化研究一一　一九八五・三）二八〇頁。
（注180）現代首里方言において、カ行音のある段すべてがhになっていたりしていないのは事実であるが、何らかの語にその痕跡としてh音が残っていないかどうか、教示を得たい。
（注181）注110。
（注182）注175論文二七〇頁。注173論文四八頁。なお、平山輝男他『琉球先島方言の総合的研究』（先掲）一〇八頁にも同じ指摘が見える。
（注183）服部四郎「日本祖語について・18」（言語　一九七九・八）一一三頁。なお、恩納方言のカ行音にh音の痕跡がないかどうか、特に老人層の調査を望みたい。
（注184）カ行オ段の形が、例えばΦumi（米）のような形で現われるのは、ko→ho→Φuの変化を経たものと推定される。oがuに変わる際に、母音uにひかれて子音hがΦに変わったのであろう。
（注185）拙著『室町時代の国語』（東京堂　一九八五・九）

（昭和六十三年十月十一日受理）